

学生のための 歎異抄入門

藤井大地著



近畿大学工学部

まえがき

本書は、『学生のための仏教入門～仏教に学ぶ生きるためのヒント～』の続編として、仏教に興味を持ってくれた学生に、世界で幅広く読まれている『歎異抄』という書物に触れてほしいと執筆したものです。

『歎異抄』は、親鸞の弟子である唯円が、親鸞の死後、親鸞の教えが様々に誤解されて伝えられていることを歎き、唯円が親鸞から直接聞いたことをもとにして書かれた書物で、親鸞の教えの中心的課題を今日に伝えるものとして広く読まれています。

『歎異抄』の解説書については、それこそ山のようにありますが、近畿大学工学部（理系）の学生に勧められる本はあまり見あたりません。そこで、本書は、学生が、前著『学生のための仏教入門～仏教に学ぶ生きるためのヒント～』を読んである程度理解してくれたという前提のもとに、私がこれまで出会ってきた先生方（主に、細川巖先生、平野修先生、児玉暁洋先生、一楽真先生、加来雄之先生、藤場俊基先生、佐野明弘先生）から聞いた教えをもとに、『歎異抄』を現代語に訳し、それに解説を加えてみたものです。

また、本書では、建築学科の学生にも興味を持ってもらえるように、哲学者プラトンのアイデア論も参照しています。ちなみに、プラトンは、建築を次のようにとらえています。

哲学者プラトンは、万有(あらゆる存在)の本源(アルケー)としてアイデアを想定し、われわれの知覚する事物はすべてアイデアを分有し、アイデアを模写す

ることによって現実の存在者となると考えた。例えば、樹木は、神の制作術によって樹木のアイデアが現実態をとったものである。人間もまた制作能力を持つ。そしてそれは二つの方向にはたらい像・形相・表象をつくる。すなわち、アイデアを直接模写して物そのものを造る方向と、神がアイデアを模写して造った形象を心象の助けを借りて、さらに模写する方向と。音楽・建築・器具の制作は第一模写に属し、第二模写は、絵画・彫刻の制作がこれにあたる。

（森田慶一著『建築論』P.162）

プラトンはソクラテスの弟子で、ソクラテスと釈迦はいずれも 2500 年前頃に生まれています。また、中国の孔子も同じ頃に生まれていますから、ほぼ同時代に、哲学、仏教、儒教の創始者が生まれていることは興味深いですね。色々勉強してみると、どうもプラトンの思想と仏教には多くの共通点があるように思います。また、最近、宗教というと警戒されますが、哲学というと普通に受け入れられますから、そういう意味でも、仏教と哲学を並べて見ることも、学生に仏教を伝える上で役に立つのではないかと思います。多少飛躍した解釈もあるかも知れませんが、そこは学生に向けた入門書ということで大目に見ていただければ幸いです。

なお、『歎異抄』は、第 1 条から第 18 条までありますが、ここでは、親鸞が直接唯円に語ったとされる第 1 条から第 10 条までを取り上げています。本書を縁として、少しでも、『歎異抄』という書物や仏教に興味を持っていただければ幸いです。

令和 2 年 3 月 著者しるす

目次

第1条	1
1.1 弥陀の誓願	2
1.2 不思議にたすけられまいらせて	6
1.3 往生をばとぐるなりと信じて	8
1.4 念仏まうさんとおもひたつころのをこるとき	12
1.5 すなはち摂取不捨の利益にあづけしめたまふなり	14
1.6 弥陀の本願には老少善悪のひとをえられず	16
1.7 罪悪深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願	19
1.8 念仏にまさるべき善なきゆへに	20
1.9 弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆへに	22
1.10 まとめ	23
第2条	25
2.1 念仏への疑い	27
2.2 ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし	29
2.3 とても地獄は一定すみかぞかし	31
2.4 弥陀の本願まこと	34
2.5 まとめ	34
第3条	37
3.1 往生とは	38

3.2 悪人とは	40
3.3 善人のすくい	42
3.4 悪人のすくい	48
3.5 まとめ	53
第4条	55
4.1 聖道の慈悲	56
4.2 浄土の慈悲	60
4.3 まとめ	63
第5条	65
5.1 一切の有情は世々生々の父母兄弟なり	66
5.2 有縁を度すべきなり	71
5.3 父母の孝養	74
5.4 まとめ	76
第6条	77
6.1 わが弟子ひとの弟子	78
6.2 はなるべき縁あればはなるる	79
6.3 つくべき縁あればともなひ	82
6.4 師の恩をもしるべきなり	84
6.5 まとめ	88

第7条	89
7.1 念仏者は無碍の一道なり	89
7.2 天神地祇も敬伏し魔界外道も障碍することなし	93
7.3 罪惡も業報を感ずることあたはず	95
7.4 諸善もをよぶことなきゆへに	98
7.5 まとめ	98
第8条	99
8.1 念仏は行者のために非行非善なり	99
8.2 20願の念仏	104
8.3 まとめ	110
第9条	113
9.1 念仏によるすくい	115
9.2 死の問題	119
9.3 還相回向	122
9.4 まとめ	124
第10条	125
10.1 念仏は人間には計れない	125
10.2 まとめ	127
参考文献	129

第1条

一、

弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏まうさんとおもひたつこころのをこるとき、すなはち摂取不捨の利益にあづけしめたまふなり。

弥陀の本願には老少善悪《まく》のひとをえられず。ただ信心を要《えう》とすとするべし。そのゆへは、罪悪深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にまします。

しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず。念仏にまさるべき善なきゆへに。悪をもおそるべからず。弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきゆへにと云々

(出典：<http://web.otani.ac.jp/tannisyo/>)

【私なりの現代語訳】

弥陀の誓願によって思いもよらない形でたすけられ、命終わる時、必ず浄土に生まれることが確信され、「仏の法に依って生きます」という心がわき起こった時、「生きていてよかった。自分は自分のままでよかったのだ。」と、ありのままの自分を受け入れることができます。

弥陀の本願が届くには、歳を重ねているとか若いとか、善人とか悪人とか、そういうことは一切関係ありません。ただ目覚めることが必要とされるだけです。なぜなら、弥陀の本願は、常に煩惱に振り回されて、火の河（怒り）と水の河（無視）で人を消し去り、互いに傷つけあうこと

に苦しんでいる（罪悪深重煩惱熾盛の）私たちをたすけたいと思って起こされた願いだからです。

したがって、本願が私に届くために、念仏以外の善は必要ありません。念仏にまさる善はないからです。またどんな悪も恐れることはありません。弥陀の本願が届くことを妨げるほどの悪はないからです。

1.1 弥陀の誓願

ここで一番わからないのは、「弥陀の誓願」だと思います。「弥陀」というのは、「阿弥陀仏」のことですが、仏教に縁のない学生ならまず「阿弥陀仏」って何？となると思います。普通は、仏教を開かれた釈迦のことかと思うかも知れませんが、そうではなくて、「阿弥陀仏」は、釈迦（仏陀）の覚られた「法（法則）」を表しています。

そして、仏教では、釈迦（仏陀）の覚られた法を「真如」とか「法性」という言葉で表します。例えば「法性」を辞書で調べると、

法の法たる性という意。人間の虚妄分別を超えた存在(法)の真実なるありよう。すべての存在の真実常住なる本性。またすべての存在の本性があらゆる差別の相を超えていることをいう。

(『浄土真宗辞典』)

また、『教行信証（証巻）』では、次のように書かれています。

実相はすなはちこれ法性なり。法性はすなはちこれ真如なり。真如はすなはちこれ一如なり。

(真宗聖典 P.280)

要するに、法性は、人間の頭（理性）でどれだけ思いをめぐらせてもわからない「ものの本性」という意味だと思います。ちなみに、これとよく似た言葉として、哲学者プラトンの「イデア」という言葉があります。プラトンは、この「イデア」について、次のように書いています。

我々の魂は、かつて天上の世界にいてイデアだけを見て暮らしていたのだが、その汚れのために地上の世界に追放され、肉体（ソーマ）という牢獄（セーマ）に押し込められてしまった。そして、この地上へ降りる途中で、忘却（レテ）の河を渡ったため、以前は見ていたイデアをほとんど忘れてしまった。だが、この世界でイデアの模像である個物を見ると、その忘れてしまっていたイデアをおぼろげながらに思い出す。このように我々が眼を外界ではなく魂の内面へと向けなおし、かつて見ていたイデアを想起するとき、我々はものごとをその原型に即して、真に認識することになる。

（『哲学キーワード事典』P.50）

要するに、イデアは、私たちが生まれてこの肉体を授かる前までは見えていたが、生まれたあと忘れ去ってしまった「ものの本性」という意味です。これは、アダムとイブが禁断の果実（知恵の実）を食べて神の国から追い出される話と共通しています。すなわち、私たちが1歳半までの赤ちゃんのように、驚きと感動で見ていた世界がイデアであり、言葉を教えられ、「私」というものを認識し、自我意識を持つことによつて見えなくなった世界がイデアなのだと思います。

また、親鸞の『教行信証（真仏土巻）』では、このイデアと同様のものを「性（しょう）」という言葉で表しているように思います。

また性と言うは、これ必然の義なり、不改の義なり。海の性一味にして、衆流入るもの必ず一味となって、海の味、彼に随いて改まらざるがごとしとなり。また人身の性不浄なるがゆえに、種種の妙好色香美味、身に入りぬれば、みな不浄となるがごとし。

（真宗聖典 P.314 浄土論註）

訳してみると、「性（しょう）」というのは、必然という意味で、改まらないという意味である。例えば、海の「性」は一つの味（塩味）で、どんなに沢山の川の真水が入っても、それは一つの味（塩味）となって、一つの味（塩味）が改まることはない。また、人身の「性」は不浄であるから、どんなに尊いものを見聞きしても、みな煩悩によって不浄なものにしてしまう。これは、「海」のイデア、「人身」のイデアを表していますね。また、この「人身」のイデアに関しては、プラトンの「肉体という牢獄」に似通った解釈をしているように見えます。

また、親鸞は、これより少し前の文章で次のようにも言っています。

一切衆生はことごとく仏性あれども、煩悩覆えるがゆえに見ることを得ることあたわずと。

（真宗聖典 P.312 涅槃経・迦葉品）

ここでは、人間には皆、「仏」の「性」があるのだけれども、煩悩に覆われているために見ることができないと言っています。この「仏性」という言葉は、プラトンの「我々の魂は、かつて天上の世界にいてイデアだけを見て暮らしていた」ということと共通していると思います。すなわち、人間の魂は皆かつてイデアを見ていたのだから、再びイデアを見ることができる可能性を秘めているということです。

ですから、プラトンの言葉では、肉体の牢獄に押し込められて見えなくなったもの、仏教では、煩悩に覆われて見えなくなったもの、それがアイデアであり「性」と言われるものだと思います。

そして、阿弥陀仏というのは、「法性」が人間の認識できる形として現れたものを表すわけです。ではなぜ、煩悩に覆われて見ることができない「法性」が、私たちの認識できる形として現れるのでしょうか？ それは、釈迦の覚った法は、それ自体が私たちを「法」に目覚めさせる働きがあることを表すためです。

この辺になってくると、プラトンの言っていることと、親鸞の言っていることは少し異なります。プラトンは、「我々が眼を外界ではなく魂の内面へと向けなおし、かつて見ていたアイデアを想起するとき、我々はものごとをその原型に即して、真に認識することになる。」と言っていますが、親鸞は「感染の衆生、ここに於て性を見ることあたわず、煩悩に覆わるるがゆえに。(真宗聖典 P.322)」と言い切っています。すなわち、私たちが、いくら自力を尽くしても、ものの本性を見ることはできないと親鸞は言うわけです。

ではどうすれば「法性」という真理を覚ることができるのか？ そこに「弥陀の誓願」というものがあるわけです。例えば、ニュートンによって発見された法則によって、今ではリンゴが木から落ちるのは重力の作用だと多くの人が知っています。ニュートンが法則を発見する以前は、重力の存在など誰も知らなかったのです。ですから、法則が発見される前と後では世界の見え方が変わってくるのです。それと同じように、釈迦が法を覚る前と後では、世界の見え方が変わるわけです。釈迦が法を

覚ったことによって、その釈迦が覚った法則が、私たちを目覚めさせる力を持つ、その法の働きを「弥陀の誓願」という言葉で表しているのです。

1.2 不思議にたすけられまいらせて

そのような「弥陀の誓願」（法の働き）によって、「不思議にたすけられた」と親鸞は言っているのですが、私は、この「不思議に」という言葉がなかなか理解できませんでした。それが、大谷大学の一楽真先生が、これを「思いもよらない形で」と解釈されて、なるほどと得心しました。要するに、「不思議に」というのは、人間の思いを破ってくる形でたすけられるということです。これは、「他力」ということと関係しています。「自力」でいくら法性を見ようとしても見えないということです。

人間は、アイデアの世界があると聞くと、そのアイデアを見てみたいと思います。プラトンによれば、絵画や彫刻、音楽、そして建築も、アイデアを模写したものと言うわけです。そうすると、ならば美術館に行って、有名な画家の絵を見たらアイデアが見えるようになるのではないか、あるいはクラシック音楽を聴いたら、あるいは美しい建築を見て回ったら、自分の力でできる「行（ぎょう）」を見つけ、それを実践しようとしてみます。そして、そういう行を積み上げていけば、やがてアイデアが見えるようになると思うのです。これが人間の自然な発想です。

ですから、仏教においても、真如・法性を悟るための様々な行が考えられ、それが実践されてきました。例えば、現代社会で流行っているヨガ教室というのがありますが、ヨガというのも、元々は法を悟るための行だったのです。座禅や瞑想というものもそうですし、お経を読んだり、お

経の題目を唱えたり、果ては千日回峰行など、ありとあらゆる行が考えられたのです。

私も、幼い頃から仏教に縁があったので、そういう行を教わりました。私が教わった行は、勤行、念仏、聞法です。毎日、仏壇の前に座って、お経を読むのが勤行です。そして、なむあみだぶつ、なむあみだぶつ、と声に出して唱えるのが念仏で、仏教のお話を聞くのが聞法です。そういう行を小学、中学、高校、大学とずっとやりました。そして、聞法をすることで、何やら浄土と呼ばれるありがたい世界があって、仏教を聞いていけば、そういう世界に生まれるものと信じていました。そして、そういう真実の世界がぼんやりと見えていたような気がしていました。

しかし、大学3年生の時に癌になり、死を目の前に突きつけられた時、それまで聞いてきた仏教は吹き飛びました。何の役にも立たなかったのです。いくら死んだら浄土に生まれると自分に言い聞かせても、次の瞬間にそんな世界が本当にあるのだろうか？となるのです。いくら不安に蓋をしようとしても、すぐにあふれ出す。これで人生が終わったら今までの人生は何だったのだろうか、空しさで居ても立ってもおれないのです。いくら念仏しても、勤行をしても、不安は収まりません。

そういう中で、細川巖先生から教えられた『歎異抄』の中の親鸞の言葉「死なんずるやらんと心細くおぼゆることも、煩惱の所為なり」で目が覚めました。その時、初めて「煩惱」というものが見えたのです。どうにもならないものをどうにかしようとして苦しんでいた我が身の姿全体が見えたのです。これが、私にとって「思いもよらない形のすくい」でした。私の方は、これまで聞いてきた教とか行によって、死への不安を克

服しようと苦闘していましたが、それこそ人間の「性（しょう）」が見えていない姿でした。人間の本性は、「煩惱」であって、死を恐れ、不安に思うのは当然のことだったのです。どんな行をもってしても不安を消し去ることができないのが私の本性で、その本性に目覚めることが、法性を覚ることだったのです。要するに、私の方は、不安を消し去ることがすくいだと思っていたのですが、本当のすくいは、不安は消えないものだと感じることになったのです。

自力の方向では「ものの本性」を覚えることはできません。なぜなら、自力は、「私」という自我を守るために行っている行為ですから、どんな行も「私」を支えるための杖になってしまうのです。そして、その杖はどんどん太くなり、ついには死を突きつけられなければ目が覚めない、そういう世界に閉じこもってしまいます。それを「疑城胎宮（ぎじょうたいぐう）」とか「懈慢界（けまんがい）」と言います。それは、多くの仏教教団が抱える問題のように思います。それに対して、「他力」のすくいは、「不思議にたすけられる」、すなわち、思いもよらない形でのすくいなのです。

1.3 往生をばとぐるなりと信じて

「弥陀の誓願」（法の働き）に不思議にたすけられて、次に出てくるのが、「往生をばとぐるなりと信じて」という言葉です。思いもよらない形でたすけられたら、往生を遂げることが信じられたということです。これはどういうことを表しているのでしょうか？

まず、「往生」というのは、「浄土往生」を表しています。では、親鸞は「浄土」というものをどういうふうにとらえていたのでしょうか？これは『教行信証（真仏土巻）』に出てきます。

謹(つつし)んで真仏土を案ずれば、仏はすなわち不可思議光如来なり、土はまたこれ無量光明土なり。

(真宗聖典 P.300)

ここで「仏」というのは、阿弥陀仏です。阿弥陀仏は「不可思議光如来」で、その仏がおられる「土」は「無量光明土」だと言っています。すなわち、親鸞は、浄土を「無量光明土」と捉えていたのです。

上述のように、阿弥陀仏は、釈迦（仏陀）の覚られた法を表します。その法が誓願という形で私たちに働きかけ、その働きによって私たちに目覚めが生じます。そして、その目覚めによって見えた世界が「無量光明土」、すなわち「浄土」だと言うのです。ですから、浄土というのは、法性やアイデアが見える世界ですね。すなわち、ものの本性が照らし出されるわけです。

そして、仏教の場合、一番に照らし出されるのは「私」の本性です。親鸞は、この本性を後の文で「罪惡深重煩惱熾盛」と言っています。それが、浄土によって照らしだされた私の真実の姿です。そして、次に、私が生きている現実世界が照らし出されます。その照らし出された姿が「穢土（えど）」とか「娑婆（しゃば）」と言われます。それがこの世の真実の姿です。

しかし、それらは到底受け入れられる話しではありませんよね。私の真実の姿が「罪惡深重煩惱熾盛」などとはとても思えません。罪は犯して

いないし、悪いこともしていない、煩惱はあるが、大抵はコントロールできていると思っています。また、この世は、汚れた世界かも知れないが、少なからず良いところもあると思っています。また、人間の力によって良い方向に変えていけると信じています。

ですから、「弥陀の誓願」によるすくいとは「不思議にたすけられる」わけです。人間の思いからすれば、「罪惡深重煩惱熾盛」が克服されることがすくいです。また、穢土とか娑婆と言われる世界が浄土になっていくことがすくいなのです。「不思議」というのは、そういう思いの方向とは全く異なる形ですくわれるということを表しているのです。要するに、「浄土」というのは、「罪惡深重煩惱熾盛」のこの身が受け取れたということです。また、この世が「穢土」だということを受けとめることができたということです。

私の体験談を例に説明すると、夫婦喧嘩は犬も食わないと言われますが、他人から見れば、本当につまらない、ささいなことが大喧嘩に発展します。内の場合も、妻は街の団地で育ち、私は田舎で育っていますから、子供の頃からの生活習慣がまるで違うのです。そうすると、妻の目から見れば、私が汚くて仕方がないのです。例えば、トイレに行った後、石けんで手を洗わないとか、水洗トイレの蓋を開けたまま流すとか、鼻をティッシュでかんで、そのまま手を洗わずにご飯を食べるとか、私の育った環境では、そんなことは当たり前なのですが、妻の目から見ると、私がい菌の固まりに見えるのです。私の方も、できる限り妻の言うことにしたがっていますが、時々、昔のくせが出て、石けんを使わずに手を洗ったり、トイレの蓋を開けたまま水を流したりするわけです。そして、それを一々咎められると、たまらなくなって、「人間は、ばい菌と共に

暮らしているのだから、少々のばい菌は許容してもらわないと困る」と言うわけです。そうしたら、そこから大喧嘩がはじまって、果ては、「もう一緒に住むことはできん。」という話しになったりします。

そんな喧嘩が続いている時に、ふと、平野修先生が、「浄土があるということは、この世は穢土なのだ」という話しをされていたのを思い出しました。平野先生は、浄土真宗の仏壇は金ぴかで明るい、それは浄土を表しているのだと。そして、仏壇の前で手を合わせたら、仏壇の扉は閉めないといけない。それは、浄土は、この世は穢土だということを照らし出す光で、仏壇の前で手を合わせて、この世は穢土だとわかったら、扉を閉めて、覚悟を決めて穢土に向かうのだと言われていました。

それで、その夜帰宅して、妻にそのことを話し、「この世は穢土だった。思いどおりにならないのはあたりまえだった。」と言ったのです。そうしたら、今まで腹を立てて口もきかなかった妻が、「そうだったね。思いどおりにならないのはあたりまえだったね。」と言って笑ったのです。そこで、互いに平野先生の言葉で目が覚めて、和解できたのです。

ですから、人間がすくわれるというのは、極楽と言われるような、温泉のようなところに行くことではないのです。真実が照らし出された時にすくわれるのです。夫婦喧嘩は、互いに相手を思いどおりにしようとする苦しみわけです。それは、自分の思いどおりになることが浄土だと思っているからです。この世が浄土にならないのは、それを邪魔する人がいるからだという発想になるのです。ですから、互いに浄土を求めて争うのです。しかし、私たちの真実は、「罪悪深重煩惱熾盛」ですから、争いがやめられないわけです。結局、自分の浄土が成り立つには、「もう一

緒には住めん」と、他を排除するしかありません。そういう真実を照らしだすのが浄土で、浄土があるから「罪悪深重煩惱熾盛」の自分を受け入れることができ、自分の思いへの執着から解放されるのです。そして、そこに、人間と人間が通じ合う場が生まれます。互いに「そうだったね」と笑える世界が生まれるのです。

そして、この「罪悪深重煩惱熾盛」の「私」というものからは、死ぬまで逃れられません。しかし、それは浄土に照らされた世界ですから、絶望ではないのです。浄土に照らされて、この世が穢土だとわかったのです。ですから、そこには浄土が見えているのです。この世は難度海と言われる、渡ることが難しい海のような世界です。しかし、命終われば、浄土に生まれるのです。ゴールが見えているから、がんばれるということがあります。死によって煩惱の身から解放されれば、いつでも浄土に生まれることができるのです。ですから、安心してこの穢土を生き抜くことができます。そのことを親鸞は「往生をとげることを信じられた」と言っているのです。ただ、この信じるというのは、自力で信じるものではありません。疑いようがない無疑の信心です。要するに、疑いようのない真実にであったということです。

1.4 念仏まうさんとおもひたつころのをこるとき

次に、「念仏を称えたいと思う心が起きる」と言っているのですが、「弥陀の誓願」（法の働き）によって、不思議にたすけられて、浄土に真実を照らしだされて、その時に、念仏を称えたいと思う心が起きるとは、一体どういうことなのでしょう？ これには、まず、「念仏」と「弥陀の誓願」の関係がわからないと理解できませんね。

「弥陀の誓願」というのは、法の働きを表すわけですが、それを端的に言えば「法に目覚めてほしい」という願いです。その願いを言葉に表したものが「南無阿弥陀仏」という念仏なのです。すなわち、「南無阿弥陀仏」というのは、「阿弥陀仏（法）に依れ」という呼び掛け（命令）です。ですから、「弥陀の誓願」は、具体的には、「南無阿弥陀仏（法に依れ）」の声として、私に届いてくるのです。

これは、前著にも書きましたが、私たちが依っているのは「私」という自我です。「私」を守るために、「私」を支える杖を集めていくのが私たちの生き方です。そして、そういう生き方が、様々な苦しみを生み出します。一番の苦しみは人間関係ですね。そして、現代は、そういう煩わしい人間関係を避けることで、孤立社会を生み出しています。地域や家族・親戚のコミュニティが失われ、独身男性、独身女性がどんどん増えています。そして、最後に待ち構えるのが孤独死です。そんな人生が果たして幸せなのでしょうか？

ウルグアイ・ムヒカ大統領の言葉のように、幸せは命あるものからしかもらえないのです。すなわち、人間関係の回復こそ、現代社会がめざすべき道なのだと思います。仏教は、そういう人間関係の回復に関係している教えです。そして、念仏は、「私」に依って生きる生き方から、仏の覚られた「法」に依って生きる生き方への転換を呼び掛けているのです。すなわち、私たちが依っている「私」というものは、実体が無く、正体不明、行先不明のもので、全くあてにならないものです。要するに「罪悪深重煩惱熾盛」です。それに目が覚めたというのが、「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて」までの文章ですね。

そして、ここには書いてありませんが、どうして目が覚めたかと言えば、「南無阿弥陀仏」の呼び掛けによって目が覚めたのです。「弥陀の誓願」＝「南無阿弥陀仏」です。念仏によって目が覚めて、不思議にたすけられるわけです。そして、「私」が「罪悪深重煩惱熾盛」を生み出していることを受け入れることができた。「私」があてにならないことが自覚できた。それが浄土を与えられたということです。「私」をあてにしなくても、立っておれる大地が見つかったのです。

そうなったら、自然と感謝の気持ちが出てきますよね。それが、「念仏もうさんと思いつ心の起きるとき」です。「南無阿弥陀仏」の呼び掛けに答えて、「仏の覚られた法に依って生きます」という宣言です。念仏を称えて生きますという宗教告白が「念仏もうさんと思いつ心」なのです。

1.5 すなはち摂取不捨の利益にあづけしめたまふなり

そして、一連の文章の最後が「すなはち摂取不捨の利益にあづけしめたまふなり」となりますが、これは、「罪悪深重煩惱熾盛」のままですくわれたということですね。浄土があるのだから、この世は穢土でいいのだということです。Only oneの自覚、天上天下唯我独尊の自覚と言ってもよいかも知れません。ありのままの自分でよかったのだという「すくい」を表していると思います。

鬱病に悩む人や、いじめの加害者になる人は、結局は、現実の自分が受け入れられないのだと思います。もう少しこうなれば自分を受け入れられると、常に条件がつきます。そして、その条件と現実が乖離していることに苦しみます。その乖離の理由を内に求めれば鬱になるし、外に求

めればいじめにつながります。常に、人を傷つけ、自分を傷つけることをやめることができません。そして、自分の欲しいものを追い続けた結果が、まわりに人がいないという、孤独の世界になっているわけです。そういう生き方を「罪悪深重煩惱熾盛」と言っているのです。

「私」という自我を頼りに生きるということはそういうことです。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六道をぐるぐる回る生き方しかできません。たとえ、天上界に行っても、そこに安心というものはないのです。そういう生き方から、仏の法に依って生きる生き方を与えられたということですね。念仏によって目を覚まし、人間関係を回復し、「罪悪深重煩惱熾盛」の身は変わることはないけれども、申し訳ないと頭を下げられる生き方を与えられるのです。

少し余談になりますが、人間、頭を下げるのは本当に容易ではありません。私は、自分は温和な性格だと思っていたのですが、歳をとるにしたがって切れやすくなってきました。特に、会議などでくだらない議論を長々とやられると無性に腹が立ってきて、机をぶっ叩いて、会議を途中退室したりします。そうすると、今度は、それが気になって夜眠れないのです。しかし、原因は、だらだらと会議をやる人間が悪いと思っていますから、謝罪することなど到底できないのです。まあ、そういうことが何回かあって、煩惱は熾盛（火が燃えるように勢いが盛ん）ということを身にしみて感じるのですが、私なりの頭を下げる術だけは身につけました。それは、人前で頭を下げるのは難しいので、とにかくできるだけ速やかにメールで謝るわけです。そして、謝罪文を書く時は、煩惱にしたがうな、いくら頭を下げて減るものではない、そう自分に言い聞かせて、とにかく怒ったことは平謝りに謝ります。だいたい、そうすれ

ば眠れるのです。そうやって、なんとか人間関係を保ってきました。そうでなければ、とっくにパワハラで訴えられていますよね（笑）。しかし、それでもどうしても頭を下げられない相手があります。それが妻ですね。こればかりは、他力のたすけがないと頭を下げられません。ただ、幸いにも、お互いに仏教を聞いてきたので、最近では、喧嘩になってもあまり引きずらないようにはなりました。お互いに、「煩惱の所為なり」と念仏申すようになったからです。まあ、私も、結婚していなかったら、「罪悪深重煩惱熾盛」の身を生きていることはわからなかったかも知れません。

摂取不捨の利益というのは、「私」が崩れ去っても、立っておれる場所があるということですね。内の夫婦の場合、両方口がたつので、言葉のパンチ力はメガトン級です。摂取不捨の利益がなかったら、とっくに別れていたかも知れません（^^）。

1.6 弥陀の本願には老少善悪のひとをえられず

次に「弥陀の本願」（法の働き）は「老少善悪の人を選ばない」ということが言われるのですが、これは「弥陀の本願」はどんな人にも平等に働くということを言っているわけです。しかし、なぜそんなことをここで言う必要があるのでしょうか？

これは、「歎異抄」という書物の名称にも関係があるのですが、唯円の生きている時代では、親鸞の教えが様々にゆがめられていたことが想像されます。それは、「他力」の教えは、人間にはなかなか受け入れ難いからです。その証拠として、親鸞は法然の教えを聞いて信心を得たわけですが、法然の死後、その法然が創設した吉水教団から、親鸞の名前は

完全に抹消されます。それだけ親鸞が嫌われていたということです。なぜ嫌われたかと言えば、法然の教えを長年聞いた弟子からすれば、親鸞は途中から入ってきた29歳の若造なのです。その若造が、法然の信心と自分の信心は同じだとか言い出すもので、そんな馬鹿なことがあるのかと、兄弟子達は腹を立てたのです。そういう話しが『歎異抄』の後序に出てきます。法然聖人は、仏教を極めた本当にすごい人で、そういう尊い師の教えを長く聞いてきた自分達でも法然聖人の信心には遠く及ばないのに、お前のような若造が何を言うか、ということですね。

これは、「他力」のすくい、すなわち「不思議にたすけられる」という経験がなければ、当然の発想と言えます。自力の行を積み上げて、すくいが成り立つなら、それこそ長く、聞法、勤行、念仏の行を積んだ人の方がすくいに近いはずです。それが、老と少の区別ですね。聞き始めの若者より、長く教えを聞いてきた老人の方が、当然仏教がわかっているはずだと思うわけです。

また、善人というのは、第3条にも出てきますが、自力作善の人を善人と言うのです。すなわち、自分の力で善を作ることができる人です。ですから、ほとんどの人は皆善人です。悪人というのは、例えば、是枝裕和監督の『万引き家族』の主人公の夫婦がまさにそうです。一生懸命生きているのに、悪しか作り出せないのです。拾ってきた子供を育てるのに、自分にしてやれるのは万引きの方法を教えることくらいしかないのです。普通なら、そういう悪人はすくわれなと思いますよね。しかし、是枝監督の映画では、そういう悪人が見事にすくわれているのです。彼らは、善人が失った人と人との絆を手に入れているのです。

普通の人間の発想からすれば、がんばった人、努力した人が報われるのであって、善人も悪人も区別なくたすかる教えなど受け入れられないのです。しかし、親鸞の教えは、あくまで「弥陀の本願」によって目が覚めることがすくいです。いくら自力の行を積んでも、目が覚めなければ、たすかるということにはならないのです。

想像するに、唯円の時代も、「他力」ということがわからなくなっていたのではないかと思います。普通は、「他力」をたのめば人間は墮落するという発想に陥ります。ですから、現代語の「他力本願」はそういう意味で使われています。法然や親鸞が生きていた時代は、その人たちを通して「他力」すなわち「法の働き」が見えていたのだと思います。しかし、そういう信心を得た人が少なくなると、具体的な「法の働き」が見えなくなります。そうすると、弥陀の本願も念仏も怪しく思えるのです。そんなものでたすかるはずはないと。

そういう問題が、この「弥陀の本願には老少善悪のひとをえらばれず」にはあると思います。

1.7 罪悪深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願

次は、老少善悪の人を選ばれない理由が出てきます。それは、「弥陀の本願」は、「罪悪深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願」だからだという理由です。この「罪悪深重煩惱熾盛」というのは、仏の目から見た私たちの本性です。仏陀の覚りの内容ですね。しかし、上述したように、これは容易に受け入れられる話しではありません。なぜかと言えば、それでは「私」が立たないからです。

長年、真宗の教を聞いた人の中には、無理矢理「私は罪悪深重煩惱熾盛の身ですから」と言う人がいます。その場合、長年仏教を聞いてきて、そう聞かされてきたので、そうだと思い込んでいるのです。しかし、それは大抵の場合、そう言っている「私」というものを尊い存在として立てているのです。それが証拠に、身近な人に、「そうそう、あんたはすぐに腹を立てるし、欲が多すぎるのよ」などと言われようものなら、とたんに「そんなことがあるものか、それはあんたが仏教を聞いてないからそうとしか見えんのよ」と、腹を立てます。

結局、「罪悪深重煩惱熾盛」というのは「私」とは並び立たないのです。すなわち、「私」を立場としない「土」が見つからない限り、「私」に目覚めることはないのです。念仏によって、浄土を与えられ、そこで初めて「罪悪深重煩惱熾盛」であったということに目が覚める。これを「信心」という言葉で表しているわけです。

1.8 念仏にまさるべき善なきゆへに

次の文章は、「しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず。念仏にまさるべき善なきゆへに。」と続くのですが、この辺が、浄土真宗がなかなか理解してもらえないところだと思います。念仏というのは、ただ、「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と称えることですが、これが本当に仏の覚られた「法」を悟ることになるのか？ということ。普通なら、そんなことで「法」を悟れるはずはないと考えます。それが証拠に、釈迦は、菩提樹の木の下で法を覚られる前に、6年もの苦行をされたではないか。また、親鸞も、29歳で法然聖人に会われて信心を得る前に、

比叡山で修行をされたではないか。たかが念仏を申したくらいですくわれるはずはない。それが、普通の人間の発想です。

しかし、法然・親鸞は、だからこそ、念仏のみですくわれると言ったのだと思います。なぜならば、法を覚るには、人間の発想を破る必要があるからです。覚りは、人間の意識を超えたところからやって来るのです。それは「私」という自我の迷妄を破るわけですから、「私」の思いをいくらめぐらせても迷いは破れません。夢の中で、いくら目を覚まそうともがいても目が覚めないのと同じです。

すでに述べたように、「私」というものは、どんな自力の行も「私」を支える杖にして行きます。仏の教えも、「私」を守るための強力な杖になっていくわけです。そして、その杖は、少々のことでは折れません。ですから、自力の行を積んだ人がどういう形ですくわれるかと言えば、臨終に仏が現前する形ですくわれるのです。要するに、死を突きつけられてやっと自我の迷妄に気がつくのです。それほど厚い壁をつくるということです。親鸞はそのことについて『教行信証（化身土巻）』次のように書いています。

それ胎生の者は処するところの宮殿、あるいは百由旬、あるいは五百由旬なり。おのおのその中にしてもろもろの快樂を受くること、忉利天上のごとし。

(真宗聖典 P.328)

この「胎生の者」というのが、自力の行を積み上げた人の行き着く姿だと言うのです。その者は、とてつもなく広い宮殿に住んでいて、その中で、忉利天のような快樂を受けると言うのです。忉利天というのは、人間界の頂点ですね。人間界の頂点に立って、他の人間を見下ろしている

わけです。俺は、長年仏教を聞いてここまで来たということですね。もうお前たちには、逆立ちしても追いつけまいということです。それは、本当に気持ちがいい世界です。私も、死を突きつけられる前は、そういうところにいたのでよくわかります。しかし、それは、本当のすくいではないし、法を覚ったわけではないということです。それを次のように書いています。

この諸々の衆生、かの宮殿に生まれて、寿(いのち)500 歳、常に仏を見てまつらず、経法を聞かず、菩薩・声聞・聖衆を見ず。このゆえにかの国土にはこれを胎生(たいしょう)という。

(真宗聖典 P.328)

私は、このことがあるから、親鸞は、念仏以外の行を勧めなかったのだと思います。すなわち、念仏は、自力の行ではなく、他力の行なのです。

「弥陀の本願」に目覚めさせるための、本願の行(働き)なのです。法は、釈迦の覚りによってすでに開かれているのです。もっと言えば、私たちの魂は、生まれる前にすでにアイデアの世界を見ていたわけです。皆、すでに仏性を持っているのです。釈迦は、それを「一切衆生悉有仏性」と覚られたのです。ですから、私たちは、ただその法の存在に気がつけばよいだけです。

念仏は、「法」はここにあるというメッセージです。私たちの苦しみの中に、すでに「法」は存在しているのです。念仏は、それに目覚めてくれよというメッセージです。念仏は、弥陀の本願からのメッセージですから、これ以上の善はないのです。私たちの仕事は、そのメッセージに気がついて、目を覚ますこと以外にはないのです。

1.9 弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆへに

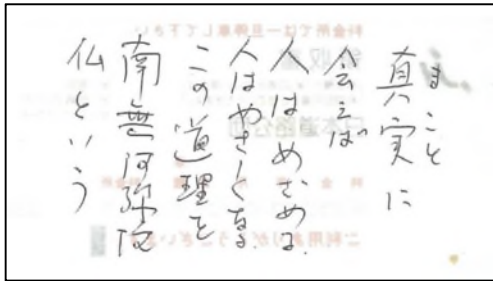
そして、最後の文章は、「悪をもおそるべからず。弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆえに」ですが、これも、普通の人が聞いたら、とんでもない話しですよ。 「悪をおそれない」などというのは、これだから宗教は困ると言われかねません。ただし、それは自分が悪ではないと思っている人が言えることですね。

先にも引用した、是枝裕和監督の『万引き家族』は、カンヌ国際映画祭の最高賞であるパルム・ドールを獲得しましたが、私は、これは仏教が生み出した、日本人独自の感性だと思います。まさに、悪人のすくいを描いているわけです。悪人というのは、誰も、好きでなるものではありません。一生懸命働いても、家族を養えるだけのお金が稼げない、それで生きるために仕方なく万引きをするのです。そういう悪人にも、すくいはあるということですね。むしろ、善人が忘れ去ってしまったものを悪人は知っているのです。いのちどうしのつながり、愛情、憎しみ、悲しみ、そういう中にかげがえのない幸せがあることを。苦しいことばかりだけれども、そこに確かな喜びがあるのです。

人間は、善人でおれる間は、そんなに大きな苦しみはありません。しかし、何かのきっかけで、鬱病や引きこもりになったら、とたんに悪人です。親鸞の定義では、善人は、自力で善を作り出せる人ですから、鬱病や引きこもり、あるいは障害を抱える人も悪人になります。要するに、善を作り出せなくなったということです。役立たずということですね。

そういう悪人が、この『歎異抄』の文章を読んだらどう感じるでしょうか。私は、感動すると思います。悪人でもすくわれる道はあるのだと。

私は、親鸞の仏道は、火の河（怒り）と水の河（無視）の間の白道だと思っています。要するに現実の苦悩の中に仏道はあるのです。怒りと無視によって人を消し去っていく生き方の中で、念仏し、弥陀の本願を思い出し、人間関係を回復していく。そこに、生まれるのは寛容の精神です。人を裁かない優しさです。皆、同じ「罪悪深重煩惱熾盛」の身を生きるものとして、仲間として、われらとして、通じ合えるのです。そこに人間の幸せはあるのだと思います。まさに、以下の平野修先生の言葉がそれを表しています。



1.10 まとめ

この第1条は、『歎異抄』という書物の中心になるものだと思います。これが理解できれば、後の文章は、自然に頭に入ってくると思います。しかし、仏の覚りというのは、人間の発想を破る教えなので、そもそも理解すること自体が無理なのかも知れません。すなわち、これは繰り返し、繰り返し読んで、そして、現実の問題にぶつかった時に、目覚めを呼び起こすものだと思います。

親鸞がここで言っているのは、「弥陀の本願」がすでにあるのだということです。すでに釈迦の覚られた法があり、それが今日まで、念仏とい

う形で伝えられてきているということです。私たちは、その法に目覚めることのみが要求されているのです。「南無阿彌陀仏」は、釈迦の覚られた法からの呼び掛けなのです。その呼び掛けに応えることが信心であり、そこに人間の行は必要ないのです。

浄土真宗は、念仏のみですくわれる教えです。では、私たちは何もしなくても良いのか？ そうではありません。私たちは、私たちに与えられた人生をまじめに精一杯生きればよいのだと思います。そして、苦しみを恐れずぶつかっていくことが私たちの仕事だと思います。人生をまじめに精一杯生きれば、苦悩の連続です。壁にぶつかり、悩み、不安になり、苦しむ、その中で念仏の声が聞こえてくるはずです。すなわち、現実の問題こそが、「弥陀の本願」を知らしめる教えなのです。そして、必ずどこかで目が覚めます。なぜなら、私たちは、皆、仏性を持っているわけですから。

第2条

一、

をのをの十余ヶ国のさかひをこえて、身命をかへりみずしてたづねきたらしめたまふ御ころざし、ひとへに往生極樂のみちをとひきかんがためなり。しかるに、念仏よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をもしりたるらんところにくくおぼしめしておはしましてはんべらんは、おほきなるあやまりなり。もししからば、南都北嶺にも、ゆゆしき学生たち、おほく座せられてさふらふなれば、かのひとにもあひたてまつりて、往生の要、よくよくきかるべきなり。

親鸞にをきては、「ただ念仏して弥陀にたすけられまひらすべし」と、よきひとのおほせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。念仏はまことに浄土にむまるたねにてやはんべらん。また、地獄におつべき業にてやはんべらん。総じてもて存知せざるなり。たとひ法然聖人にすかされまひらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ。そのゆへは、自余の行もはげみて仏になるべかりける身《み》が、念仏をまうして地獄にもおちてさふらはばこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ。いづれの行もをよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。

弥陀の本願まことにおはしまさば、釈尊の説教、虚言なるべからず。仏説まことにおはしまさば、善導の御釈、虚言したまふべからず。善導の御釈まことならば、法然のおほせ、そらごとならんや。法然のおほせまことならば、親鸞がまうすむね、またもてむなしかるべからずさふらふ歟《か》。詮《せん》ずるところ、愚身の信心にをきてはかくのごとし。

このうへは、念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々の御はからひなりと云々

(出典：<http://web.otani.ac.jp/tannisyo/>)

【私なりの現代語訳】

皆さんが、関東から京都まで10余りの国を越えて、命がけで私(親鸞)を訪ねて来られたのは、往生極樂の道が、念仏より他にあるのではないかと、私に問い直すためですね。しかし、私が、念仏以外に往生の道があることを知り、また、それに関する法文(教え)なども知っていると思われるのは大きな誤りです。もしそう思われるなら、奈良や比叡山にも、優れた学僧たちが多くおられるので、その人たちに会って、往生の方法を納得がいくまで聞かれるべきです。

私(親鸞)においては、「ただ念仏して、阿弥陀仏にたすけられなさい」との法然聖人の仰せ(で目が覚めたのですから、それ)を信じるほかにありません。念仏が本当に浄土に生まれる種になるのか、あるいは、地獄に落ちる業になるのか、そんなことは私のあずかり知らないところです。たとえ法然聖人にだまされて、念仏して地獄に落ちたとしても後悔はありません。なぜなら、念仏以外の行を励んで仏に成れる身であれば、念仏申して地獄に落ちれば法然聖人にだまされたという後悔が起きるかも知れませんが、どんな(自力の)行をもってしても、目覚めることが難しい身ですから、地獄こそ私の居り場所なのです。

弥陀の本願が真実ならば、釈尊の説かれた教えは嘘ではないはずです。仏陀(釈尊)の説かれた教えが真実ならば、善導の解釈が間違っているはずはありません。善導の解釈が真実ならば、法然の仰ったことは嘘と

は言えないはずですが。そして、法然の仰せが真実ならば、私（親鸞）が言うことも、嘘とは言えないのではありませんか。私（愚身）の信心においてはこのとおりです。この上は、念仏をとって信じようとも、また、捨てようとも皆さんのご自由です。

2.1 念仏への疑い

第2条は、念仏への疑いに対する親鸞の回答ですね。

第1条に示されるように、親鸞の教えは、ただ念仏を称えることによって仏の法を覚るというものですが、そんな簡単な行で、仏の覚られた法を悟れるはずはないと、普通はそう考えます。それは、前著に述べたように、私たちは、賢善精進をもって頂点を目指すという教えしか知らないからです。この世の中を生き抜くためには、自らの力によって善を作り出す人になるしかないと思っています。ですから、自力を尽くさずに、ただ念仏を称えることですくわれるとか、何の努力もしない悪人がすくわれるとか、そんな教えには到底納得がいかないのです。ですから、念仏の教えには、必然的に批判が巻き起こります。

親鸞は、35歳のとき、念仏批判がもとになって起きた「承元の法難」によって、京都から現在の新潟に流罪になります。そして、5年後に赦免され、その3年後に新潟から関東に赴き、そこで約20年間の布教を行います。そして、63歳頃に再び京都に戻るのですが、親鸞が帰京した後、再び、関東で念仏に対する批判が巻き起こるのです。それで、親鸞は、門弟の動揺を収めるために、息子の善鸞を関東に派遣するのですが、結局、善鸞は、その批判に耐えきれず、親鸞の教えに背くような教えを説いてしまうのです。

ここは私の想像ですが、念仏への批判を現代版にすると、悪人がすくわれると言うなら、強姦魔のような凶悪犯罪者も念仏ですくわれるのか、あるいは、生活保護を受けて毎日パチンコに通っているような者も念仏ですくわれるのか、葬式や法事で儲けたお金で、高級車を乗り回す坊さんでも念仏ですくわれるのかなど、要は、念仏の教えは、まじめに生きているものが馬鹿を見る教えではないかということです。そうすると、私が善鸞の立場でも、「それは違う、悪人は悪人のままですくわれることはない。悪人は善人になってすくわれるのだ。」と言ってしまおうと思います。また、「念仏すれば他人のものを盗んでもよいと言うような人間は地獄に落ちる。」と言うと思います。そうなると、やはり念仏以外の善行が必要なのだとなります。人間の発想では、どうしてもそうなるのです。

それで、善鸞も、念仏だけでは足りないということを言い出したのだと思います。そして、自分は、父の親鸞からひそかに伝授された教えがあって、往生を遂げるためには、まずは私の教えにしたがって善行に励む必要があるのだと、そんなことを説いたのではないかと思うのです。そうすると、門弟たちは驚いて、「そんな教えは、自分たちは聞いていない」となったわけです。親鸞聖人は、「ただ念仏によってたすかる」と言われていたのに、やはり自力の行は必要だったのか？ 善鸞の言うことは本当だろうか？ これは、親鸞聖人に直接聞かなければ納得が行かないと、関東の門徒衆の代表が命がけで京都まで赴いたわけです。これが第2条の背景だと思われます。

以上のような背景がわかれば、この第2条の前半の意味は、読み取れると思います。

2.2 ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし

そして、次の段落で、自分（親鸞）においては、「ただ念仏して、阿弥陀仏にたすけられなさい」と言われた、法然聖人の仰せを信じるほかにはないと言っているのですが、これには少し解説が必要だと思えます。

多少独自解釈になるかも知れませんが、親鸞は、「ただ念仏して、阿弥陀仏にたすけられなさい」という法然の言葉で目が覚めたのだと思えます。29歳まで比叡山で修行して、それでもはっきりしなかったことが、この言葉ではっきりしたのです。何がはっきりしたかと言うと、「いずれの行もおよびがたき身」ということです。9歳から29歳までの20年間にわたる仏道修行は無駄だったということです。この言葉は、それほどの衝撃ではなかったかと思えます。

9歳から20年間、仏の悟りを得ようともがき苦しみ、比叡山の修行に限界を感じて山を下り、そして、迷いに迷ったあげく法然聖人にお会いして、「どうしたら仏の覚りを得られますか」とお聞きしたら、「ただ念仏して、阿弥陀仏にたすけられなさい」の一言ですから、普通ならとても納得はいかないと思えます。しかし、親鸞は、この一言を聞いて、自分の思いを破られたのだと思えます。

親鸞は、比叡山ではだめだったが、再び法然聖人の下で修行して、今度こそ仏の悟りを得たい、そう思っていたと思えます。そして、どんな行でも死ぬ気でやり抜こうと、そう決意して法然聖人にお会いしたと思えます。そうしたら、法然聖人の答えは「ただ念仏して、阿弥陀仏にたすけられなさい」ですから、全くの肩すかしだったと思うのです。しかし、だからこそ、親鸞は、自分の思いの方向にすくいはないと覚ったのだと

思えます。自分の思いにしたがってどれだけ修行しても、そこに覚りが開かれることはない、その「思い」こそ煩惱であって、その煩惱に自分はずがみついていたのだと、我が身の真の姿が照らし出されたのだと思えます。要するに前著でも述べたように、「私」という自我に支配されていたことに目が覚めたのです。（なお、この「思い」という表現は、大谷大学の加来雄之先生から教えていただきました。）

すなわち、念仏というのは、誰でもできる易しい行（易行）だからこそ、人間の思いを破るのだと思えます。人間の思いは、難しい行（難行）を求めます。そして、難しい行をやり遂げてこそ、そこにすくいがあると考えます。また、何かに依存するのは弱者のすることだと思っていますから、「阿弥陀仏にたすけられる」というのも、人間の思いからすれば、受け入れ難いことです。そういう人間の思いを破ってくるものとして、「ただ念仏して、阿弥陀仏にたすけられなさい」という言葉があったのです。しかもそう言われたのは、仏教を知り尽くした法然聖人ですから、親鸞は、この一言で、自分の本性を覚られたのだと思えます。

ですから、念仏の教えは、「信心」ということなくしては、理解ができません。すなわち、念仏は、自力の迷妄を破るための行なのです。だから「易行（いぎょう）」なのです。「難行（なんぎょう）」であれば、いつでも「私」という自我を支える杖になります。そして、難行を積み上げることで、その杖は太く強固なものになって行きます。それでも、とことんやれば親鸞のように行き詰まるということが起きるかも知れませんが、だいたい中途半端なところで腰を下ろします。

ですから、念仏以外の行を立てれば、たちまち自我の餌食になります。やっぱりそうかとなるのです。やはり、まずは善人になる修行を積んでから、それから念仏なのだとなります。それなら納得がいくのです。悪人も、善人になってから念仏ですくわれる、それならわかります。ですから、善鸞の言うことはもっともだと思うのです。それだけ、人間の迷いは深いし、自我の支配からの解放は容易ではないのです。

2.3 とても地獄は一定すみかぞかし

親鸞は、29歳の時に「ただ念仏して、阿弥陀仏にたすけられなさい」という教えで、「いずれの行もおよびがたき身」という我が身の現実に目が覚めるのですが、その時、それが直ちに次の「地獄は一定すみかぞかし」に結びついたわけではないと思います。すなわち、29歳で法然聖人に会った時の目覚めは、「あっ！」という一瞬の驚き（感動）だったと思います。そして、そこから、自らを目覚めさせたものへの探究が始まったのではないかと思うのです。すなわち、「信心」は終着点ではなく出発点だということです。

それは、念仏の教えの原典にもなっている『大無量寿経』という経典がそのような展開になっているからです。これは、藤場俊基先生から教えてもらったのですが、『大無量寿経』という経典では、まだ悟りを得ていない阿難という仏弟子が、釈迦（世尊）の姿を見て感動するということから始まっているのです。これは、『教行信証（教巻）（真宗聖典P.162）』にも取り上げられていますが、ある時、阿難が、釈迦がいつもと違って見えると言うのです。ただ、それは阿難が悟りを開いたわけではありません。阿難は、釈迦の説法を最も身近で長く聞いた人ですが、

釈迦が亡くなるまで悟りが開けなかったとされています。その阿難に、釈迦がいつもと違って、光り輝いているように見えたのです。すなわち、悟りを開いていない阿難に仏の姿が見えたのです。

ちなみに、「仏々相念」という言葉があって、仏の姿は、仏にしか見えないと言われます。その人が覚りを開いた人かどうかは、覚りを開いた人にしかわからないということです。前著の映画『マトリクス』の例で説明すると、ずっと仮想現実の中で生きている人間が、誰が仮想現実の外の世界を知っている人間かを見分けられないのと一緒にです。コンピュータの支配を抜け出した人間同士は、互いのことがわかりますが、仮想現実の中で生きている人間は、仮想現実の世界しか知りませんから、外の世界があると言われても信じられないのです。

ですから、阿難にとっては、一瞬ながら、仏の覚りの世界が垣間見えたのですから、「あっ！」という驚き（感動）ではなかったかと思います。しかし、阿難には、なぜ釈迦がそのように見えたのか、その理由はわからないのです。

そして、『大無量寿経』では、釈迦が、その阿難に起こった出来事を、なぜそのようなことが起きたのかを解説していくのです。そして、それが、釈迦（仏陀）の覚った法の働きであり、その法の働きを、法蔵菩薩が浄土を建立（こんりゅう）し、それを衆生に届けるという物語的な表現で表すわけですから。そこに出てくるのが、弥陀の本願であり、その本願の中心が、「南無阿弥陀仏」という言葉を届けることで私たちを目覚めさせ、浄土に生まれさせるという願いなのです。

親鸞も、法然聖人の「ただ念仏して、阿弥陀仏にたすけられなさい」という一言で、自分の思いを破られたのです。しかし、その時は、なぜ自分にそのようなことが起きたのかはわからなかったと思います。そこから、本格的に法然聖人の教えを聞き、念仏の意味、阿弥陀仏の意味を確かめられていかれたのではないかと思います。そして、その帰結が、『歎異抄』で言えば、第一条だと思います。

そうすると、この第2条の「地獄一定」というのは、第1条の「罪悪深重煩惱熾盛」に対応していることが読み取れます。要するに、浄土によって照らされたものは、罪悪深重煩惱熾盛の我が身であり、この世は穢土だという現実です。それは、浄土がなければ、認めがたいものですが、浄土があるからこそ、それを現実として受け止めることができます。

そして、罪悪深重煩惱熾盛の我が身は、時には地獄をつくりだしますが、それは、そういう煩惱を抱えている身ですから仕方がないのです。そこが、「成仏」と「信心」の違いだと思います。仏に成れば、ずっと悟りの世界を生きるわけですが、「信心」は、「南無阿弥陀仏」の呼び掛けによって目が覚めるのです。いつもは煩惱に覆われて見えないものが、念仏によって見えるのです。私たちが生きている現場は、穢土であり、娑婆ですから、いつでも地獄を作りだし、それによって苦しみます。そういう中で、「南無阿弥陀仏」の声が、私たちの目を覚まし、自我への執着から解放し、一瞬の浄土を与えます。それが「信心」なのです。私たちは、浄土を生きることはできませんが、浄土があるということがすくいになるのです。そして、そこには、沢山の仲間がいます。皆、煩惱を抱えて苦しんでいるわけです。そこに真の平等があり、人間関係回復の道があるのです。

2.4 弥陀の本願まこと

最後に、念仏の教えが真実(まこと)であることを、弥陀の本願、釈尊、善導、法然、親鸞という順に説いていきます。要するに、弥陀の本願が仏教を貫いているということです。これこそが、私たちが目覚めていく唯一の方法だと言っているように思えます。弥陀の本願、すなわち法の働きが、「南無阿弥陀仏」の呼び掛けとして、私たちの目を覚まそうとしているのです。私たちは、それに気がつけばよいだけです。法然聖人も、法然の師である善導大師も、釈尊もそう言われているのではないかと思います。

念仏は、誰でもできる易行なので、私たちには疑いが生じるのです。そんなもので本当に大丈夫か?となるのです。しかし、それは、仏教のことを知り尽くした法然も、その師である善導も、さらに仏教の祖である釈尊もそう言われているのに、それでもあなたは疑うのかということです。念仏は、易行であるがゆえに「私」が問われるのです。そんなものでたすかるはずはないと思っている自分とは一体何者なのかということです。そこに光をあてるものが「ただ念仏」という教えなのです。

2.5 まとめ

第2条の最後は、「念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々の御はからひなり」という言葉でくくられています。これは、念仏は、私たちに与えられた問いだということです。南無阿弥陀仏は、仏の法に依りなさいという呼び掛けですが、さて、あなたはどうしますか?ということです。それは、私が頼りにしている「私」という自我意識を照らしだそうとしているわけです。あなたが頼りにしているものは、

本当に確かなものですか？と言うわけです。そして、そういう呼び掛けによって、自我の正体に目覚めた時、はじめて、南無阿弥陀仏の呼び掛けの意味がわかるのです。それが「信心」と呼ばれるものです。しかし、信心を得たらそれで終わりではなく、そこから念仏を中心とした新たな人生が始まるのです。

最後に、以上のまとめとして、細川巖先生が生前よく取り上げられていた、マルティン・ブーバーの思想を引用しておきます。

ブーバーによれば、科学的、実証的な経験や知識は「それ」というよそよそしい存在にしか過ぎず、「我」はいくら「それ」に関わったとしても、人間疎外的な関係から抜け出すことはできないという。その「我－それ」関係に代わって真に大切なのは「我－汝」関係であり、世界の奥にある精神的存在と交わることだという。そして、精神的存在と交わるためには相手を対象として一方的に捉えるのではなく、相手と自分を関係性として捉えること、すなわち対話によってその「永遠のいづき」を感じとることが不可欠だとする。

(<https://ja.wikipedia.org/wiki/マルティン・ブーバー>)

私は、念仏を哲学的に言えば、ブーバーの「世界の奥にある精神的存在と交わる」手段だと思います。すなわち、念仏は対話であり、対話によってその「永遠のいづき」を感じとるものだと思います。すなわち、念仏は「弥陀の本願」との対話なのです。浄土（イデア）を思い出す手段と言ってもよいと思います。

親鸞がこの条に言っているとおり、念仏の行は私たちに縛りません。ただ、問いかけるのみです。念仏を取るも、捨てるも、私たちに任されているのです。要するに、「私」を支える杖にはならないということです。

まったく頼りにならないように見える念仏だからこそ、私たちの「思い」を破って、私の現実を照らしだすことができるのです。

第3条

一、

善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや。しかるを、世のひとつねにはく、悪人なを往生す、いかにいはんや善人をや。この条、一旦そのいはれあるににたれども、本願他力の意趣にそむけり。

そのゆへは、自力作善のひとは、ひとへに他力をたのむころかけたるあひだ、弥陀の本願にあらず。しかれども、自力のころをひるがへして、他力をたのみたてまつれば、真実報土の往生をとぐるなり。

煩惱具足のわれらは、いづれの行にても、生死をはなるることあるべからざるをあはれみたまひて、願ををこしたまふ本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もとも往生の正因なり。よて、善人だにこそ往生すれ、まして悪人はと、おほせさふらひき。

(出典 : <http://web.otani.ac.jp/tannisyo/>)

【私なりの現代語訳】

善人でさえ仏の法を覚えるのだから、悪人はなおさら仏の法を覚えることができる。しかしながら、世間の人には、悪人でさえ仏の法を覚えるのなら、善人が仏の法を覚えないはずはないと言います。これは、一見、正しいように思われますが、仏の法が私たちに働きかけるという他力の原理に反しています。

その理由は、自力で善を作り出せる人は、仏の法に依ろうとしないので、仏の法は届きようがありません。しかし、自力で仏の法を覚えることは不

可能だと目が覚め、他力（仏の法の働き）に依るならば、疑いの城から抜け出して、我が身の真実に目覚めることができます。

煩惱を抱えている私たち悪人は、どんな自力の行を尽くしても、生死の迷い（分別心）を離れることができないことを憐れんで、仏の法は、「南無阿弥陀仏」という言葉になって、私たちの目を覚まそうとしているのです。ですから、仏の法（念仏）に依るしかない悪人こそ、仏の法が届く対象なのです。それで、善人でも仏の法を覚えるのだから、まして悪人はと言われたのです。

3.1 往生とは

まず、最初の段の「往生」の意味について復習しておきたいと思います。すでに述べたように、「往生」は、「浄土往生」を意味しています。そして、「浄土」は、私たちの現実を照らす光です。すなわち、「南無阿弥陀仏」の呼び掛けによって目が覚めた世界を表しています。それは、この身は罪悪深重煩惱熾盛であり、この世は穢土だという現実です。しかし、それがなぜすくいになるかと言うと、それが浄土によって照らし出された真実だからです。

前著で例にあげた映画『マトリクス』でも、ネオが仮想現実から抜けだし、目が覚めた世界は悲惨な世界でした。しかし、それは疑いのような真実の世界なのです。そこには、確かに生きているという実感があるわけです。それと同様に、浄土も、自分は、今、ここに、確かに存在し、生きているという実感を与えるものです。

これは、藤場俊基先生から教わったのですが、私たちは、常に「不安」と「不満」と「後悔」を抱えて生きていたと言われました。そして、不安は「未来」への不安、不満は「現在」への不満、後悔は「過去」への後悔だと。そして、仏教は、未来への「安心」と、現在への「満足」と、過去への「納得」を与えるものだ。

ですから、浄土というのは、まさに「安心」と「満足」と「納得」を与えるものです。まず、安心というのは、命尽きれば浄土に生まれるという安心感です。生きている間は、煩惱に振り回され、罪悪を作っていくしかないこの身ですが、命尽きれば煩惱から解放され、この現実を照らし出した仏の覚り（阿弥陀）の世界に生まれるという安心感ですね。また、過去の後悔についても、煩惱を抱えているこの身であれば当然だったと納得できます。そして、罪悪深重煩惱熾盛の我が身の現実を受け取ることができ、自分は自分のままでよかったと言えるのですから、そこに満足が与えられます。

ただし、私たちは、この世で浄土を生きるわけではありません。私たちが生きる場所はいくまで穢土なのです。しかし、念仏するところに、時々浄土を垣間見ることができます。そして、命終わる時、浄土に生まれることが定まるのです。それを「正定聚（しょうじょうじゅ）」と言います。正しく定まった人々の集まりという意味です。また、これは「不退」とも言います。もとに戻ることがないということです。もとに戻らないというのは、目覚めた世界を忘れないということですね。実は、その「正定聚不退」に定まることを「往生」という言葉で表しているわけです。ですから「往生」は「成仏」とは異なるのです。

3.2 悪人とは

次に、「悪人」についてですが、親鸞の言う悪人とは、現代では、どういう人たちのことを言うのでしょうか？ それがわからないと、この第3条は理解できないと思います。

第1条では、是枝裕和監督の『万引き家族』の例を出しましたが、悪人というのは、自らの力で善を作り出すことができない人ですね。『万引き家族』の主人公は少し極端な例ですが、現代社会で言えば、引きこもりや鬱病の人、働けなくなった老人などがこれにあたると思います。要するに、社会から役に立たないと思われている人たちです。いわゆる社会的弱者のことを悪人と言っているように思います。

ですから、善人であっても、いつでも悪人になりえます。たとえば、病気や事故で簡単に悪人に転落するのです。私も、21歳で癌になりましたが、それで欠陥品の仲間入りです。それまで一生懸命がんばって広島大学にも合格したのですが、癌という病気になったばかりに、結婚相手としては傷物です。そうすると、色々なものをあきらめなければなりません。結婚も、家庭を持つことも、余命半年ではかなわないのです。そうすると、自力で善を作り出そうにも、不安と不満で何もできなくなります。

鬱病という病気も、現代では8人に1人がかかる病気だと言われていますが、これも、不安と不満で身動きが取れなくなる病気だと思います。また、パニック障害なんかも、将来への不安が引き金になって起きる病気だと言われますが、それだけ現代社会は不安に満ちているのです。要するに、一度悪人になったら簡単には這い上がれないということです。

たとえば、鬱病が原因で退職すれば、次に正社員として雇用してくれる会社は限られてきます。会社としても、自殺されたら困ると言うわけです。ニートやフリーターも、一度そういうレッテルを貼られると、正社員になることは難しいのが現実だと思います。ですから、現代社会を生き抜くには、善人であり続ける必要があるのです。

そして、善人であり続けて、立派な人だと言われて、無事定年を迎えたとしても、現代ではほとんどの人は、幸せな老後を送れません。十分な年金がもらえないからです。そして、認知症にでもなれば、老人ホームに送られて、子供からも見放されます。寝たきりになっても、お金のない人は十分な介護は受けられません。介護をする人も大変なので、結局、早く死んでくれないかなというような目で見られます。ですから悪人というのは、人ごとではないのです。

そして、この第3条の最初の段では、世間の人は、悪人がたすかる教えなら善人がたすからないはずはないと言うが、それは、本願他力の趣旨に反していると言うのです。すなわち、念仏の教えは、悪人がたすかる教えだと言っているのです。そして、善人もたすかるけれども、そんなに簡単な話ではないと。その理由を、以下に説明していくのです。

なお、この「悪人」については、「悪人の自覚のある人」という解釈もありますが、悪人の自覚というのは、罪惡深重煩惱熾盛の我が身に目が覚めることですから、そういう人が往生するのはあたりまえの話です。それでは、この第3条の意味は読み取れないように思います。私は、この第3条の悪人は、社会的弱者のことを言っているように思います。親鸞自身も、時の権力から弾圧されて、僧籍を剥奪され、流罪にされるわ

けですから、社会的弱者の一人だったと思います。そして、関東の門徒衆の多くは、「屠沽（とこ）の下類（げるい）」と蔑まれていた人々でした。この「屠沽」というのは、親鸞の著作『唯信鈔文意』の中で、次のように説明されています。

屠(と)は、よろずのいきたるものを、ころし、ほふる(切りさばく)ものなり。これはりょうし(獵師)というものなり。沽(こ)は、よろずのものを、うりかうものなり。これは、あきびと(商人)なり。これらを下類というなり

(真宗聖典 P.553)

要するに、獵師や商人など、親鸞の時代では、社会的差別を受けていた人たちです。そういう社会的に悪人と呼ばれる人たちと寄り添って生きたのが親鸞という人であり、そういう時代背景のもとに、この第3条は語られているように思います。

3.3 善人のすくい

次に、中段において、なぜ「善人」の往生が難しいかを説明しています。ここでは、善人を自力作善の人と言い換えています。自分の力で善を作り出せる人のことを善人と言っているわけです。

前著で述べたように、私たちは、「私」という自我を守るために、「私」を支える杖(ラベル)を集めて生きています。そういう杖を着実に集めている人のことを善人と言うのです。要するに社会的弱者の反対側にいる人です。そして、親鸞は、そういう善人は、仏の法を覚ること(往生)は難しいと言うのです。なぜかと言うと、善人は、他力を必要としないからです。第2条のところでも述べたように、念仏は誰にでもできる行ですから、念仏など役に立たないと思っているのです。善人の目標は、

「私」を支える杖を増やし、その杖を太く強固にしていくことです。杖にもならないような教えには興味がないのです。

ですから、仏教も「私」を支える杖になると思えば聞くのです。自力の行を積み上げて、皆から尊敬される立派な人になって行く、そういう仏教なら聞いてみようとなるのです。ですから、善というのは、世間的な善（世間善）もありますが、仏教の善（小乗善、大乘善）もあるのです。善人は、知識だけでなく、人格的にも、人から愛され、信頼され、尊敬される人になっていくことが必要なのです。それで、大学でも教養の授業があって、哲学や宗教の勉強をするのです。ですから、人格形成のために仏教を聞く、そういう仏教なら受け入れられるのです。そして、そういう目で見ると、念仏の教えは、非常に情けない教えに見えるのです。

私の経験を例にすると、私の父は、生前、「仏教は念仏ひとつだ」とよく言っていたのですが、私は、父が中卒で教養がないからそんなことを言っているのだと思っていました。そして、大学時代に細川巖先生に出会い、毎月の講義で、七高僧と呼ばれる人たちの著作を徹底的に勉強し、毎日の勤行でお経を暗記し、念仏が自然に口に出てくるように練習し、そういう行を積み上げていくことでだんだん仏教がわかるようになる、これこそ仏教だと思うようになりました。すなわち、自力の行を積み上げていくことが仏の悟りを得る道だと思い込んでいたわけです。

しかし、親鸞は、そういう善人は、仏の法を覚えることは難しいと言っているのです。なぜかと言えば、そういう善人が行き着く先は、「疑城胎宮（ぎじょうたいぐう）」という疑いの城だからです。要するに、本当の目覚めではないということです。映画『マトリクス』で言えば、仮想

現実を出ていないということです。親鸞は、そういう疑城胎宮の世界に閉じこもることを「邪定聚（じゃじょうじゅ）」と言っています。「正定聚（しょうじょうじゅ）」ではないと言うのです。「邪」という間違ったところに定まってしまうのです。

そして、そういう疑城胎宮に閉じこもるとどうなるか。第1条の解説でも述べたように「寿（いのち）500歳、常に仏を見たてまつらず、経法を聞かず、菩薩・声聞・聖衆を見ず。（真宗聖典 P.328）」と言うわけです。仏教を聞いていながら、仏を見ていないということです。経法も聞いていない、仏道を歩んでいる人も見えていないと言うのです。不思議ですよ。なぜそんなことになるのでしょうか？

これは、仏教が目覚ますものになっていないということです。仏教が、「私」という自我の迷いを破るものではなく、「私」を支える杖になっているのです。例えば、学歴はたいしたことはないけれども、仏教では負けないとなるのです。これは結構太い杖です。社会的弱者になっても、自分には仏教があるとなりますから、「私」というものに疑いが生じないのです。

そして、疑城胎宮の人は、自分は、自分が見えていると思っています。罪悪深重煩惱熾盛の自分だと見えているような気がしているのです。要するに自己反省です。そして、自分は、長年聞いたからそれがわかるけれども、それはそんなに簡単にわかるものではないと、他を批判的に見るようになります。しかし、それは本当の目覚めではないのです。それがどこでわかるかと言えば、それはある特定の集団にしか通用しないということです。同じ「邪定聚」の集まりの中でのみ通用することであっ

て、一步娑婆に出れば、すぐに吹き飛ばすわけです。親鸞は、それを「その胎生の者は、みな智慧なきなり。(真宗聖典 P.328)」と言っています。

そして、疑城胎宮に陥った人は、自分をありがたい人間(善人)として保つ必要があるのです、自力の行を手放せなくなります。そして、他からの批判も聞こえなくなるのです。そして、無意識に人をランク付けしていきます。あの人は、どれくらい仏教を聞いたか、どれくらい善行を積んだか、そういうことで人を見ていくわけです。そして、善行を積んでいない人を見下すようになります。そして、今度は、仏教で頂点を目指すような生き方になっていくわけです。私も、長い間、そういう世界にいたのでよくわかります。

では、そういう善人が往生を遂げることは不可能なのかというと、親鸞は、「自力のころをひるがへして、他力をたのみたてまつれば、真実報土の往生をとぐるなり。」と言っています。この「自力のころをひるがえす」というのは、親鸞で言えば、法然聖人に会って、「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし」と教えられて、比叡山の20年間の修行がすべて無駄だったと覚ることに相当しています。しかし、これは容易なことではありません。これまでの実績をすべて捨て去るのですから、並大抵なことではないのです。

また、親鸞が自力の心をひるがえすことができたのは、法然聖人の言葉をとおして仏の法が届いたからです。法然聖人の言葉が、親鸞の思いを破ったのです。そして、仏の法が届いたのは、自分の力ではなく、仏の法の働きですから、これは他力です。ですから、自力の心をひるがえし

て、他力をたのめば、疑城胎宮から抜け出して、真実報土(真の浄土)に生まれると言っているのです。

以下は補足になるのですが、念仏の教えが説かれている『大無量寿経』では、善人のすくいをどのように説いているのかについて触れておきたいと思います。

『大無量寿経』の中で、善人のすくいとして立てられた本願は、48の願の内の19番目の願です。

たとひ我、仏を得んに、十方衆生、菩提心(ぼだいしん)を発(おこ)し、もろもろの功德(くどく)を修して、心を至し願を発(おこ)して我が国に生まれんと欲(おも)わん。寿(いのち)終わる時に臨(のぞ)んで、たとひ大衆と圍繞(い)にようしてその人の前に現ぜずんば、正覚を取らじ。

(真宗聖典 P.18)

これは、一念発起して、多くの善行を積んで、浄土に往生したいと願った人は、臨終の時に、多くの尊い人たちに囲まれて、その中に仏が現れると言っています。これは、臨終の時に仏が現れると言っているのです、言い方を変えれば、死ぬ直前まで仏を見ることはないと言っているように読めます。すなわち、死を突きつけられないと目が覚めないと言っているのです。

それで私は、この19願というのは、非常に不思議な願だなと思っていました。自力作善の人が、疑城胎宮に閉じこもって真実を覚ることが難しいのなら、最初から自力作善の人は、往生を遂げることは難しいと言えはいいのに、なぜこんなまわりくどい言い方をするのだろうか?と。それを読み解くヒントが『歎異抄』の第17条にありました。

辺地の往生をとぐるひと、つみには地獄におつべしといふこと。この条、いづれの証文に、みえさふらふぞや。学生だつるひとのなかに、いひいださることにてさふらふなるこそ、あさましくさふらへ。経論正教をば、いかやうにみなされてさふらふやらん。信心かけたる行者は、本願をうたがふによりて、辺地に生じて、うたがひのつみをつぐのひてのち、報土のさとりをひらくとこそ、うけたまはりさふらへ。信心の行者すくなきゆへに、化土におほくすすめいれられさふらふを、つみにむなしくなるべしとさふらふなるこそ、如来に虚妄をまうしつけまいらせられさふらふなれ。

(出典：<http://web.otani.ac.jp/tannisyo/>)

ここで、「辺地（へんじ）」というのは「疑城胎宮」のことです。これは、唯円の時代には、「疑城胎宮に生まれた人は、ついには地獄に落ちる」と言う人がいたということですね。「善人はたすからんぞ」というわけです。善人は、悪人を見下しますから、悪人の方は、善人を見返してやりたいわけです。私も、善人から悪人に転落しましたから、その気持ちはよくわかります。しかし、この第17条は、そう言う人をいさめているのです。

そして、この中で、善人（信心が欠けている行者）は、本願を疑っているために辺地（疑城胎宮）に生まれたのだから、その疑いの罪を償った後に報土（浄土）の覚りを開くと言われていました。そして、その次に「信心の行者少なきがゆえに、化土に多く勧め入れそうろう」とあるわけです。ここで「化土」というのは、「仮の仏土」と言われるのですが、要は「真の仏土（浄土）」ではないという意味です。そうすると、信心の人が少ないから、善人のために仮の仏土を建て、善人をそこに勧め入れ

られたのだとなります。そこは、仮の土であって、真の浄土ではないわけです。すなわち疑城胎宮なのです。

これはどういう意味かと言うと、善人に自力の行ではたすからないと言えば、誰も仏教に興味を示さなくなります。そうすると、仏道修行に励む人も、経典を解説する人もいなくなるわけです。ですから、阿弥陀仏（仏の法）としては、善人が仏の法を覚る道も示しておく必要があったのです。そのために、この19願が立てられているのです。しかし、その19願のすくいとは、臨終に仏が現れるというすくいです。果たして、自力作善の人はそれで納得するのでしょうか？ それで長い間疑問でした。

しかし、この第3条で19願の意味を読み解くことができました。要するに、この19願は、「自力のこころをひるがえして、他力をたのみなさい」という願なのです。すなわち、自力無効を覚らせるための願いなのです。「このまま自力の行を尽くしても、死ぬまで真の仏土には到りませんよ」と言っているのです。「あなたを真の仏土に導くのは、仏の法の働き、すなわち、念仏だけですよ」と呼び掛けているのです。少なくとも、親鸞は、そのように19願を読んでいるように思います。

3.4 悪人のすくい

では、悪人はどうなのでしょう。3段目で、親鸞は、悪人のことを「煩惱具足のわれら」と言いかえています。そして、そんな悪人は、どんな行をもってしても、生死（しょうじ）を離れることができないと言っています。

この「生死（しょうじ）」というのは、生と死を分けて考える人間の迷いのことを表します。要するに、生命（いのち）は生と死を超えて連続しているのに、自分の命は、生まれてから死ぬまでだと思い込んでいる自我意識の迷いを言っているのです。もっと端的に言えば、死を受け入れられないということです。

藤場俊基先生の言い方で言えば、悪人というのは、いつも、不安と不満と後悔にさいなまれて生きている人を言うのです。それを親鸞は「煩惱具足のわれら」と言っています。そして、弥陀の本願は、そういう悪人をあわれんで起こされた願いなのだ。

この弥陀の本願については、第1条で詳しく解説しましたが、要するに、仏の法が、南無阿弥陀仏という言葉になって、私たちに働きかけ、私たちの目を覚まそうとしていることを意味します。すなわち、南無阿弥陀仏というのは、「仏の法に依りなさい」という、仏の法からの呼び掛けを表すのですが、誰に呼び掛けているのかと言えば、それが悪人だと言うのです。要するに、苦しみのまっただ中にいる人です。一番に手を差し伸べるのは、おぼれかけている人だということです。

前著でも述べたように、私たちは「私」という自我意識に支配されて生きています。そして、「私」の思いどおりの自分が実現されていれば苦しみはないのですが、現実はその通りなりません。そして、「私」が思う理想の自分と、現実の自分が乖離すれば、それが鬱病を引き起こしたり、あるいは他人をいじめたりすることにつながります。要するに、自分の現実が受け取れないのです。そこに苦しみが生じます。

仏陀の覚りは、そういう人間の在り方に光りを当てるもので、南無阿弥陀仏は、「私」という自我の支配を離れて、仏の法に依って生きなさいと呼び掛けているのです。そして、その呼び掛けに気がついて、「私」という自我があてにならないものだと思えることが信心であり、そこに、自分の現実を、現実のままに受け取れる場（浄土）が与えられ、これでよかったのだという満足が与えられるのです。そういう原理からすれば、「私」の思いどおりにならないことに苦しんでいる悪人こそ、仏の法が届く対象になるわけです。

先日、「発達障害がある大学生への支援」に関する講演会があったのですが、発達障害の人は、自分が「普通」ではないということに苦しむそうです。普通のことが普通にできないから、普通にできるようになりたいと思うのだそうです。要するに、第3条の言葉で言えば、善人になりたいのです。普通のことが普通にできるのが善人です。しかし、発達障害の人は、脳の回路が普通の人と違って、さまざまな適応障害を起こすのです。

ですから、発達障害の人は、「私」の思いどおりに「我が身」がコントロールできないことに苦しんでいるのです。要するに、普通にならなければならないという「思い」に苦しむのです。

しかし、普通にならなければならないと誰が決めたのでしょうか？ それは、単なる社会の価値観であって、神さまが決めたわけではありません。社会の都合によって決めつけられているだけです。そもそも、善悪にしても、人間の都合で善悪が決められるのであって、生命（いのち）という観点から見れば、善悪など無いのです。

例えば、以下の写真のススキや朝顔も、道路のアスファルトと縁石の隙間から顔を出して、懸命に生きているのですが、人間から見たら迷惑な雑草（悪人）なのです。しかし、こんな雑草も、私たちに感動を与えるのです。自然の偉大さを教えてください。ですから、神さまの目から見れば、この世に無駄ないのちなどどこにもないのです。人間の都合で、これは善、これは悪、これは普通、これは普通じゃないと決めつけているだけです。



ですから、発達障害なども、人間の浅ましい価値観で、そう呼んでいるだけで、それはその人の個性なのです。どんな人間も、天上天下唯我独尊の存在なのです。そういうことを教えるのが仏の法であり、その仏の法が、南無阿弥陀仏という言葉として、私たちの目を覚まそうとしているのです。

これは、大谷大学の加来雄之先生から教えていただいたのですが、安田理深という先生が「不安こそ如来である」と言われたそうです。この「如来」というのは、「阿弥陀如来（＝阿弥陀仏）」のことですが、「如し」

が「来る」ことを表しています。「如し」というのは、「あるがまま」という意味ですから、「如来」というのは、「あるがままの私」が、私のところにやって来ることを表します。ですから、「如」が私のところに来ると、「あるがままの私」が私として受け取れるのです。すなわち、信心ですね。要するに、私たちに信心を与えるものが「如来」です。そして、安田先生は、「不安こそ如来である」と言われたのです。すなわち、「不安」というものは、私たちに目覚めをうながしているものだという事です。

悪人は、不安と不満と後悔で身動きが取れない人です。そういう悪人に目覚めをうながすものこそ、「南無阿弥陀仏」という念仏であり、弥陀の本願なのです。不安、不満、後悔を、自力で克服できる人が善人ですが、そういう人には、本当の目覚めは起きないということです。「私」への疑いを持たないわけですから目覚めようがないのです。

先の発達障害の講演会では、発達障害と診断された人の体験談も紹介されたのですが、ある当事者が、「過去と他人は変わらない。変わるのは自分だけ」ということに気づき、「人に会いたいエネルギーを、人と適度な距離を保ち、孤独力を楽しむエネルギーに意識して変えていった」という話しをされたそうです。この「孤独力」というのは、孤独に耐える力ではなく、一人の生活を満喫する、楽しむという意味だそうです。「なんで自分はこんなのだろうか」、「どうして周りには自分のことを理解してくれないのだろうか」、そういう不満ばかりを抱えていた人が、「過去と他人は変わらない」と言えたのです。ここには、大きな転回があったように思います。「私」が発する「思い」に振り回されていても

仕方がないと気づかれたのだと思います。自分の思いを破られて、そこに、新しい生き方が生まれたのです。

仏の法も、人間にそういう生き方の転回を与えるものだと思うのです。ですから、真宗の教は長く聞かないとわからないという人がいますが、私は、それは違うのではないかと思います。本当に苦しんでいる人は、この『歎異抄』を読んで目を覚ます人もいると思います。念仏は、私のためにあったのだと、驚きと感動をもって目を覚ます人が必ずいると思うのです。

3.5 まとめ

現代社会は、普通の人しか生き残れない社会になりつつあります。しかし、いずれAIロボットが普及すれば、その普通の人でさえ生き残れない社会になるわけです。すでに人間の価値観は行き詰まりつつあるように思います。今こそ、善人も、悪人も、皆、平等に幸せになれる社会を模索すべき時代が来ているのではないのでしょうか。

『歎異抄』の言葉は、そういう新しい社会を模索する上で、大きなヒントを与えるもののように思います。多様性（ダイバーシティ）を認め合う社会がどうやってできるのか、それは、「私」という自我を中心とした価値観では実現できないと思います。人間は、もう一度、プラトンのアイデアや、仏教の真如・法性の世界を思い出す必要があるのです。そして、誰もが、真如・法性の覚りを開くことができる教えとして、念仏の教えが伝えられてきているのです。

私たちは、いつでも悪人に転落します。人生、そんなに甘いものではありません。一生を善人で過ごせるのは、限られた人です。たとえ、天上界に登りつめた人でも、次に待っているのは地獄です。しかし、悪人に転落した人にこそ念仏の教えは届くのです。

ですから、苦しみや悩みは、避けるものではありません。乗り越えるものです。念仏の教えは、それを乗り越える方法を教えているのです。「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし。」この一言が、親鸞を目覚めさせ、その後も、多くの人たちの目を覚まし続けてきたのです。こんな教えが、日本に存在することを、もっと多くの人に知ってもらいたいものだと思います。

第4条

一、

慈悲に聖道・浄土のかはりめあり。聖道の慈悲といふは、ものをあはれみ、かなしみ、はぐくむなり。しかれども、おもふがごとくたすけとぐること、きはめてありがたし。浄土の慈悲といふは、念仏して、いそぎ仏になりて、大慈大悲心をもて、おもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり。

今生に、いかにいとをし不便とおもふとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲、始終なし。しかれば、念仏まうすのみぞ、すえとをりたる大慈悲心にてさふらふべきと云々

(出典：<http://web.otani.ac.jp/tannisyo/>)

【私なりの現代語訳】

聖道の慈悲と浄土の慈悲には違いがあります。聖道の慈悲というものは、人を憐れみ、悲しみ、育みます。しかし、思うようにたすけられることはほとんどありません。これに対して、浄土の慈悲というものは、念仏して、いそぎ阿弥陀仏になって、大慈大悲心をもって、思うように衆生をたすけることを言うのです。

この世では、どんなに愛おしく不憫だと思っても、よくご存知のようにたすけられることはほとんどないので、私たちの慈悲は一貫しないのです。ですから、念仏申すことだけが、私たちにできる末通った大慈悲心なのです。

4.1 聖道の慈悲

まず、聖道の慈悲ですが、これは、わかりやすく言えば、私たちの愛情ですね。ただし、私たちの愛情は、煩惱の一つでもあるので、恋愛感情のような愛情（愛欲）とは違います。すなわち、人を慈しむ純粋な愛情のことです。

わかりやすいのは、親の子供に対する愛情ですね。母親の子供に対する愛情は、無償の愛と言われますが、これは聖道の慈悲に近いと思います。そういう聖道の慈悲で、親は一生懸命子供に愛情を注いで育てます。しかし、多くの場合、思うようには育ちません。特に最近では、不登校、引きこもりが増えていると聞きます。また、受験に失敗してやる気を失ったり、折角大学を卒業したのに、就職がうまく行かずに、ニートやフリーターになってしまったりと、こんなはずではなかったということがよく起こります。また、親の期待が大きすぎて、その期待と自己の現実のギャップのために鬱病を発症してしまう学生もいます。しっかり愛情を注いで育てたつもりなのに、思うようにはいかないわけです。

私の場合も、大学までは順調に、親の期待どおりに育ったのですが、大学3年で癌になり、余命半年の宣告を受けるわけですから、親はたまったものではなかったと思います。実際、私の父親は、私が癌になったことに思い悩んで、そのストレスで胃癌になり、57歳で死んでしまうわけです。もし、私の子供がそういう病気になったら、私も、自分の命を捨ててでもたすけたいと思うでしょうが、それでもたすからない時はたすかりません。

このような聖道の慈悲について、私の具体的な経験をお話しすると、私が大学院に通っていた頃だったと思うのですが、新興宗教の洗脳を受けて、そこから救い出されて仏教を聞きにきていた若者がいました。その若者をなんとかたすけたいと思ったことがあります。まさに、聖道の慈悲だったと思います。しかし、後に、彼は自殺してしまうのです。ご両親は浄土真宗の門徒さんでしたが、ご両親の無念を思うと胸が張り裂ける思いがしました。その頃、平野修先生に、この話をして、なぜ自分は彼を助けることができなかつたのだろうかとお聞きしたことがあります。平野先生は、それに対して「願海は二乗雑善（ぞうぜん）の中下の死骸を宿さず。（真宗聖典 P.198）」という言葉で答えられたのですが、その時はよく意味がわかりませんでした。今になって思うと、平野先生は、人をたすけることができるのは、願海（弥陀の本願）であって、私たち（二乗雑善の身）がいかに自力を尽くそうとも、たすけることは不可能だということと言われたのではないかと思います。

もう一つの経験は、職場でハラスメントの被害を受けて悩んでいた友人をなんとかたすけたいと、5年近く支援したことがあります。この問題は裁判にまで発展しましたが、友人の鬱病が深刻化し、結局、友人は退職せざるをえませんでした。この時は、私と、心療内科のお医者さんと、私の先輩と同僚の4人でタッグを組み、大学の管理組織と被害者の職場改善を求めて戦いました。しかし、すでに友人が鬱病を発症していたために、周囲の理解が得られず、結局、被害者である友人が孤立を深めていくことになりました。そして、私は、この問題で、聖道の慈悲の限界を思い知らされました。結局、職場環境をいかに改善しても、被害者の加害者への恨みは消えないのです。そして、その恨みは、加害者だけで

なく、周囲の傍観者にも伝染していきます。周囲の人間がすべて自分をいじめているように見えてしまうのです。

鬱病というのは、自分の理想と現実のギャップに苦しむわけですから、その苦しみをどこかにぶつけないと居ても立ってもおれないのです。ですから、それが外に向く時は、加害者への怒りや、傍観している周囲への憎しみにつながるのです。そして、内に向かえば、リストカットなどの自殺未遂につながります。友人は、その衝動を抑えるために、毎日、強い精神安定剤を飲んでいましたが、それこそ本人にとっては地獄の日々だったと思います。ですから、私たちがいかに彼をたすけたいと思ってもどうにもならないのです。なぜなら、彼をたすけられるのは、彼自身だからです。自分が自分を苦しめているという自我の迷妄が破れない限り、自分をたすけだすことはできないのです。

そして、第4条の2段目では、「今生に、いかにいとをし不便とおもふとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲、始終なし。」とあります。すなわち、私たちの慈悲というのは、いつのまにか始まり、いつのまにか終わるということです。ハラスメント被害を受けた友人に対しても、私の先輩が退職され、友人の鬱病がひどくなるにしたがって、私の方も、少しずつ距離を置くようになりました。そして、彼が退職した後は、ほとんど交信がなくなりました。結局、私たちの愛情は続かないのです。そして、私たちの愛情には、どこかに、これだけしてあげたのにといい思いが潜んでいます。ですから、愛情はいつでも愚痴に変わるので。私も、彼に一度愚痴を言ったことがあります。私も、私の上司も、君を支援して大学側と戦ったせいで、私の上司は、退職時に名誉教授の候補から外され、私も大学の重要な仕事からはことごとく外された

と。実際には、彼の責任ではないのですが、ついそんな愚痴が出てしまうのです。ですから、その辺が、聖道の慈悲の限界なのです。いかに愛おしい、不憫だと思っても、その愛情は続きません。そして、いつの間にか終わるのです。

他にも、親の介護なども、聖道の慈悲の限界を知る良い例だと思います。聖道の慈悲をもって、親の面倒を見たとしても、それで親が満足するかという問題です。尽くしても、尽くしても、不満ばかり言われると、ついには投げ出されたくになります。また、最近では、子供が親の面倒を見ることは少なくなり、妻が夫の面倒を見る、あるいは夫が妻の面倒を見る老々介護が一般的になっています。これも聖道の慈悲で行うものだと思いますが、それこそ、「この慈悲始終なし」ではないかと思います。ですから、老人ホームなどで働く人は大変だと思います。へたに聖道の慈悲を起こすと身が持たないと思います。人間の欲というのは切りがありませんから、不満を言う人に、どれだけ手厚い介護をしても、不満はなくならないからです。

ですから、聖道の慈悲については、「存知のごとくたすけがたければ」とあります。皆さん、「たすけることが難しいことはよくご存知でしょ」と言うわけです。聖道の慈悲を起こした人なら、誰でも経験していることだと。どんなに、愛おしい、不憫だと思っても、身がもたないのです。結局、途中で投げ出してしまうことになるのが現実ではないかということです。

4.2 浄土の慈悲

では、もう一方の浄土の慈悲についてはどうか。これについては、文章を読んでもなかなか理解に苦しむと思います。しかし、これはたすけられる側から考えれば、読み解けると思うのです。

すなわち、私たちがたすかるというのはどういうことかということです。これは第3条のところでも述べましたが、私たちがたすかるというのは、私たちの不安と不満と後悔が、安心と満足と納得に変わることです。しかし、私たちの不安と不満と後悔は、人から憐れみ、悲しみ、育まれて解消するようなものかということです。

私は、大学時代に癌を患い、私の両親は、聖道の慈悲を起こして、本当に私のことを憐れみ、悲しみ、育んでくれました。しかしそれは、私にとって何のすくいにもならなかったのです。実際、自分のことは自分で精一杯で、親の心配など眼中にありませんでした。そして、私を死への不安からすくい出したのは、細川巖先生から教えられた親鸞の言葉だったのです。要するに、細川先生と親鸞をとおして、弥陀の本願に触れたことが私にとってのすくいだったのです。

ハラスメント被害を受けた友人の場合も、彼に安心と満足と納得を与えるものは、彼自身と周囲の人間を責め続けている「私」という自我に目が覚め、「私」から解放されることしかなかったと思うのです。すなわち、弥陀の本願に触れて、浄土を与えられることしか、彼がたすかる道はなかったのです。私も、彼にそのことは言い続けたのですが、結局、彼が本気で仏教に耳を傾けることはありませんでした。しかし、何度か目を覚ましかけたことはあったのです。その時彼は周囲の教員に「迷惑

をかけました」と謝ることができたのです。私は、その時、確かに彼は目を覚ましたと思うのです。弥陀の本願は、一瞬ながら彼に届いたように思いました。ですから、私たちは彼をすくうことはできませんでしたが、彼に頭を下げさせたものは、やがて彼を本当のすくいに導くと思うのです。私は、それが浄土の慈悲と呼ばれるものだと思います。いつか、本当の目覚めが起きるまで働きつづけるのが弥陀の本願であり、念仏なのです。

老人介護にしても、介護される老人は、不安と不満と後悔で満ちているわけです。老人ホームに送られた人の多くは、なぜ自分はこんな目に遭わなければならないのかという思いで一杯だと思います。特に、これまで善人だった人は、そういう思いが強いと思います。これまで家族や社会に尽くしてきたのに、その報いがこれかとなるのです。ですから、どんなに周囲の人から愛情をかけられても、それが満足につながらないのです。

ですから、たすけられる側のすくいは、弥陀の本願に触れて、浄土を与えられるしかないのです。すなわち、弥陀の本願（＝南無阿弥陀仏）のみが、私たちに、安心と満足と納得を与えるのです。聖道の慈悲は、自力の利他（りた）ですが、それで人がたすかるというのは、きわめて稀だということです。

では、私たちになすすべは無いのか？ 結論から言うと、無いのだと思います。それが「浄土の慈悲といふは、念仏して、いそぎ仏になりて、大慈大悲心をもて、おもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり。」の文章だと思います。要するに、私たちをたすけられるのは、仏のみだ

ということです。ですから、本当にたすけたいなら、私たちが仏になるしかないと言っているのです。しかし、私たち凡夫が、今生（こんじょう）で仏になることは不可能ですから、仏になるためには、煩惱具足のこの身から自由になるしかありません。すなわち、命終わるということです。命終わって、いそぎ浄土に生まれ、阿弥陀仏になって、思うがごとくたすけていく、それが浄土の慈悲だと言うわけです。これは何を言わんとしているかと言えば、いかに自力を尽くそうとも、人をたすけることは不可能だということです。言い方を変えれば、他力をたのむしかないということです。

親鸞の『教行信証（化身土巻）』に、

『観経』の定散諸機は「極重悪人唯称弥陀」と勸励したまえるなり。濁世の道俗、善く自ら己（おのれ）が能を思量（しりょう）せよとなり。

（真宗聖典 P.331）

とあるのですが、自分の能力をよく考えてみなさいということです。ここで、『観経』の定散諸機は、聖道の慈悲で人をたすけたいと思っている人たちです。そういう人たちに対して、この濁世（よごれた世界）で、そんなことが可能ですか？ と言うわけです。自分というものをよく見てみなさい。あなた方は、極重の悪人ではありませんか？ 善人のふりをしているけれども、その心根は、自分のことしか考えていないのではありませんか？ 結局は、人を自分の思いどおりにしたいだけで、そうならない人は切って捨てるような慈悲しか持ち合わせていないのではありませんか？ と問いかけているのです。そんな私たちをすくえるのは、ただ念仏のみですよと言っているのです。

ですから、浄土の慈悲は、阿弥陀仏の慈悲であって、人間の慈悲ではないのです。したがって、私も、あなたも念仏によってたすかっていくしかないということです。弥陀の本願によって、仏の法に目覚めていくしかすくわれようのない身だということです。

私たちの慈悲は、始終がない慈悲だけれども、阿弥陀仏の慈悲は、時も場所も選ばず、常に私に働きかけているのです。南無阿弥陀仏として、いつも寄り添っているのです。だから、念仏申すことのみが末通る大慈悲心だと言っているのです。

4.3 まとめ

第4条は、なかなか理解しがたいように思います。特に、最近、聖道の慈悲という言葉自体が死語になりつつあるように思います。核家族になり、親子関係も希薄になり、子が親の面倒を見るということも少なくなっているように思います。また、結婚しても、気に入らなければすぐに離婚するし、子供を設けない家庭も増えています。地域や職場のコミュニティもどんどん希薄になり、互いに干渉しなくなりました。ですから、どんどん人間が孤立化していくわけです。老人ホームに入っても、子供はほとんど訪ねて来ないという話もよく聞きます。

しかし、現実問題、核家族で育った人間が、親の面倒を見られるかと言えば、それは不可能に近いと思います。多くの老人は、第3条の悪人ですから、不安と不満と後悔で一杯なのです。ですから、聖道の慈悲を起こして、子が親の面倒を見ても、子の方が精神的に参ってしまうと思います。そういう問題に対して、この第4条は、共に念仏申して生きる道を示しています。これは、私たちにとって大きなすくいだと思うのです。

親も子も共に、弥陀の本願によってたすけられていくしかないというところに、大きな安心が得られるように思います。

また、引きこもりの子供を抱えた親なんかも、不安と不満と後悔で一杯だと思います。なんとかしてやりたいと思っても、何もできないわけです。それこそ出口が見えないのです。そういう人に、この第4条は、どう響くのでしょうか。「念仏申すことのみが末通る大慈悲心だ」という言葉が、大いなる光になるのではないのでしょうか。子供も親も、共に念仏していくしかない。それは、親にとってすくい言葉だと思います。共に「私」という自我の支配から解き放たれて、与えられた命を精一杯生きるしかない目が覚めるのですから、肩の荷がおりると思います。どうかしなければという「思い」から解放されることが人間に喜びを与え、生きる力になっていくわけです。

目の前の現実、簡単には変わりません。しかし、心は自由になります。それが、念仏によって浄土を賜るということだと思います。そして、一瞬でも、目が覚めれば、後は、念仏が本当の目覚めに導いてくれます。それこそが末通る大慈悲心なのです。

第5条

一、

親鸞は、父母の孝養のためとて、一返にても念仏まうしたること、いまださふらはず。そのゆへは、一切の有情は、みなもて世々生々の父母兄弟なり。いづれもいづれも、この順次生に仏になりて、たすけさふらふべきなり。

わがちからにてはげむ善にてもさふらはばこそ、念仏を廻向して、父母をもたすけさふらはめ。ただ自力をすてて、いそぎ浄土のさとりをひらきなば、六道四生のあひだ、いづれの業苦しづめりとも、神通方便をもて、まづ有縁を度すべきなりと云々

(出典：<http://web.otani.ac.jp/tannisyo/>)

【私なりの現代語訳】

私(親鸞)は、亡くなった父母を供養するために念仏をもうしたことは、ただの一度もありません。それは、生きとし生けるのものは、みな、一つのいのちでつながっている父母兄弟のようなものだからです。いづれもみな、順に命を終えて阿弥陀仏になってたすけるべき存在なのです。

念仏が、自分の力で励む善であるなら、自分の念仏を差し向けて父母をたすけるということもあるかも知れません。しかし、念仏は阿弥陀仏の行ですから、自力を捨て、命終わって浄土に生まれ、阿弥陀仏になったなら、どのような業苦しんでいようとも、あらゆる手を尽くして、まづ縁の有る人からたすけるべきなのです。

5.1 一切の有情は世々生々の父母兄弟なり

第5条は、なかなか読み解くのが難しいのですが、私なりの解釈を述べてみたいと思います。

まず、第4条の解説でも述べたように、浄土のすくいは、共に念仏によってすくわれるという、いわば関係存在のすくいです。例えば、夫婦の問題は、どちらか一人がすくわれてもそれで解決とはなりません。ハラスメントやいじめの問題についても、被害者と加害者の両方がすくわれなければ、本当のすくいにはならないのです。すなわち、離婚や退職による解決は、一時的な手段で、根本的な解決にはなりません。結局は、どちらにも不安と不満と後悔を残すこととなります。

また、引きこもりも、本人だけの問題ではないように思います。親や本人の人間関係、社会の在り方など、様々な問題が複雑にからんでいるように思います。前著でも述べたように、人間は、「私」という自我が傷つくことがたまらなく嫌なのです。一步外に出れば、「私」が傷つくので引きこもってしまうのです。要するに、「私」を支える杖が細くて、すぐに折れてしまうのです。ですから、「私」を支える杖がなくても、立っておれる大地が必要なのです。それが浄土と呼ばれるものです。

ですから、引きこもりの問題が解決するには、本人もそうですが、親も浄土を見つける必要があるのです。引きこもった人間が安心して出て来られるような場(空気)が必要なのです。しかし、現代は、家庭にも、社会にも、そのような場が失われています。善を作りだせない悪人の居場所がどこにもないのです。すなわち、どこに行っても努力が要求される社会になっているわけです。

自然界を見渡すと、家（巣）の中に引きこもって出てこない動物はいないように思います。なぜなら、毎日、生きるために外に出て、命がけで食べ物を探す必要があるからです。外に出れば、様々な天敵に狙われます。しかし、それでも生きるためには巣から出なければなりません。そして、他のいのちを食し、成長し、伴侶を得て、子孫を増やし、子を守り、育て、そして、次にいのちのバトンを渡していく。それが生きるということだと思えます。しかし、現代社会では、そういういのちの営みがほとんど見えなくなっています。

池井戸潤の『ノーサイドゲーム』というテレビドラマがありましたが、ラグビーというスポーツは、人間が狩猟採取民であったことを思い出させますね。ただ、仲間のために、応援してくれる人のために、いのちをかけて戦う、それは動物としての本来の生き方なのかも知れません。人間が狩猟採取民であった時代も、家族や共同生活を営む仲間のために、いのちがけで狩りをし、獲物を仕留め、皆で喜びを分かち合い、生きる幸せを感じていたと思うのです。また、獲物を狩るということは、相手もいのちがけで抵抗してきますから、それこそいのちといのちのぶつかり合いです。ですから、人間の方も、けがを負ったり、死んだりすることもあったと思います。そういういのちがけの戦いに勝利し、相手のいのちをいただいて、そのいのちが私たちの血となり肉となり、私たちが生きるということが成り立っていたのです。そこには、命を奉げてくれた相手への感謝があり、尊敬の念があったと思います。それが人間本来の生き方だったのです。（『サピエンス全史（上）』¹⁴によれば、250万年の人類の歴史の中で、農業革命が起こったのは1万2千年前から、狩猟採取民だった時間の方が圧倒的に長いわけです。）

そういう狩猟採取民であった頃のいのちといのちのやりとりを、私たちは、ほとんど忘れ去っています。すなわち、現代は、いのちをいただいて、いのちを生きるという生き方を忘れているのです。今は、ほとんどのいのちは加工された状態で私たちのところにやってきます。また、牛や豚や鶏は家畜として飼われ、魚もその多くが養殖されています。ですから、それらは、「いのち」ではなく、食料という「もの」になっているのです。すなわち、私たちは、「いのち」をいただいているのではなく、「もの」を食べているのです。

しかし、そのしっぺ返しが、いずれ人間にもやって来ると思います。その内、人間も狭い部屋に閉じ込められ、牛や豚や鶏のように飼われる時代が来るのではないかと思います。病院や老人ホームは、すでにその様相を呈しています。要するに、人間も社会の役に立たなくなったら「もの」扱いされるということです。「私」という自我がこのまま膨張すれば、いずれそうなっていくと思います。それが、人間が浄土を失った姿だと思えます。あるいは宗教を失った姿と言ってもよいかも知れません。

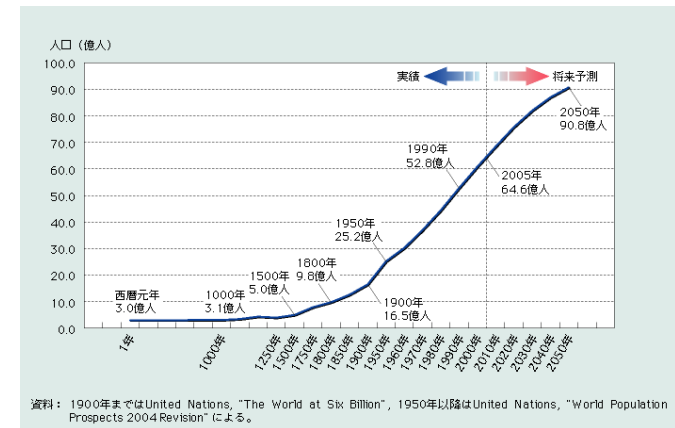
ですから、現代社会には、漠然とした不安が蔓延しているように思うのです。第3条の言葉で言えば、悪人の居場所がないのです。一部の善人のみが社会の中核にいて、後はみな、家畜のように扱われる時代が来るのではないかと？ 引きこもっている人たちは、そういう浄土を失った世界を敏感に感じ取っているのではないかと思います。すなわち、現代社会は、「一切の有情は、みなもて世々生々の父母兄弟なり」というような世界を失っているのです。

少し話をもどすと、第5条は、念仏の教えは、個人的なすくいではないと言っているように思うのです。亡くなった父母を供養するというのは個人的な話です。それに対して、弥陀の本願は、十方の衆生に対して願われているのです。その中には、人間だけでなく、六道四生（ろくどうししょう）のあらゆる生き物、果ては蜻蛉蠕動（けんぴねんどう）の類（たぐい）（『大阿彌陀經』）まで含まれるのです。蜻蛉（けんぴ）というのは、飛び回る虫などですね。蠕動（ねんどう）は、くねくねと動く生き物です。私が嫌いな、蚊や蛾、蛇やムカデやうじ虫なども浄土の住人なのです。これは何を意味するかと言うと、浄土というのは、すべてのいのちが一つにつながっている世界だということです。言い換えれば、私たちは、一人で生きているのではないということです。

これは、NHK スペシャル『人体』でやっていたのですが、私たちの腸には、1000 種類、100 兆個もの腸内細菌がいるそうです。そして、それらの細菌は、私たちの身体を病気から守っている免疫細胞の訓練に役立っていると言うのです。ですから、ある種類の腸内細菌が少なくなると、私たちの身体には様々な異常が起きるのだそうです。ですから、私たちの身体は、様々な細菌と互いに無くてはならない関係として共存しているのです。

また、私たちの身体の約 37 兆個の細胞も、日々生滅を繰り返し、約 7 年間でそのほとんどが新しいものに入れ替わるそうです。さらに、人間の臓器に指令を送っているのは、脳だけではなく、脂肪や筋肉や骨からも、様々なメッセージ物質が出ているのだそうです。ですから、私たちの身体は、様々な細胞がネットワークを形成し、互いに情報を交換し合って健康を保っているのです。

ですから、前著でも紹介した地球が一つの生命体だというガイヤ仮説には説得力がありますね。地球上のすべての生き物は、地球という生命体を維持するための細胞なのだと思います。そして、それぞれの細胞が、それぞれの役割を果たすことで、この地球という生命体の健康を保っているのです。しかし、下記の世界人口の推移（内閣府資料）を見ても、500 年前の科学革命⁴以降の人類は、明らかに地球の癌細胞ですね。



人類 250 万年の歴史⁴の中で、ほんの 1000 年あまりで、人類の人口は爆発的に増加しているのです。そして、その間、人類は、森林を破壊し、砂漠化を進行させ、オゾン層を破壊し、二酸化炭素を増やし続け、空気を汚し、海を汚し、そして、人間以外の多くの生物種を絶滅させてきました。そして、ついに地球も末期症状となり、悲鳴を上げているのです。その悲鳴は、異常気象という形で現れていますが、相も変わらず人類はそれに目を向けようとしません。（それが癌細胞の特徴なのかも知れませんが。）

ですから、私たちは、「一切の有情は、みなもて世々生々の父母兄弟なり」ということを思い出す必要があるのです。私たちは、一人で生きているではありません。多くの植物に酸素をもらって、多くの生き物のいのちを摂取して、人体の中でも、あらゆる細胞がそれぞれの役割を果たし、それらがうまく調和して、私たちが生きるということが成り立っているのです。

ですから、人類は、皆、アイデアの世界を思い出す必要があるのです。自我の迷妄を破って、真如・法性を覚る必要があるのだと思います。哲学でも、仏教でも、キリスト教でも、イスラム教でも、なんでもいいので、人間の愚かさを自覚しなければ、この地球が持たないように思います。親鸞の「いづれもいづれも、この順次生に仏になりて、たすけさふらふべきなり」には、何かそんな大きな願いを感じます。

5.2 有縁を度すべきなり

少し話が大きくなりましたが、現実問題、地球が悲鳴をあげていても、私たちができることは限られています。原発問題ひとつ取っても、喉元過ぎれば熱さ忘れるで、結局、何も変わりません。あれだけひどい目に遭っても、また同じ過ちを繰り返そうとするのです。そして、総論賛成、各論反対で、放射性廃棄物も福島に置き去りです。福島の人がかわいそうと言うけれども、それが自分の近くに来るのは絶対に嫌なのです。人間は、我人共に本当に愚かです。

親鸞が生きていた時代も、何度も大飢饉にみまわれて多くの人が目の前で飢え死にしていくわけです。第4条と第5条の背景には、そんな現実を感じます。たすけたいと思ってもどうにもならないのです。目の前で

次々と人が死んでいくのに何もできないという無力感ですね。そういう現実に対して、私たちは何をすればいいのか？ その答えがこの第5条だと思ふのです。それは、縁の有る人（有縁の存在）からたすけるしかないということです。

ただし、第4条にもあるように、聖道の慈悲で人をたすけることはできません。たすけることができるのは、弥陀の本願なのです。私たちがたすけたと思って、それは本当のすくいにはならないのです。細川巖先生が、荷物を引いて坂道を上るロバの話をよくされていました。急な坂道に大きなくぼみがあって、いつもロバがそこで苦しむので、ある人が、可哀そうに思って、その坂のくぼみを埋めてやったと。そうしたら、そのロバの飼い主が、ロバの引く荷物をさらに増やしたので、ロバは過労で死んでしまったと言うのです。私たちの愛情というものは、そんなものだと言われていました。苦しみを除いたつもりが、もっと大きな苦しみを与えてしまったということですね。

ですから、私たちの慈悲は、真の意味で人をたすけることはできません。たすけることができるのは、仏（阿弥陀仏）なのです。ですから、第4条も第5条も、仏に成ってたすけるという言い方になっています。目の前に死にかけている人がいても、私たちは無力です。私たちができるのは、共に念仏して、弥陀の本願（＝南無阿弥陀仏）にたすけられるしかないのです。「思い」を破られて、いのちの尊さに目が覚め、たとえ残り少ないいのちであっても、そこに仕事を与えられる。それが真の意味のすくいだと思います。どんな仕事を与えられるかと言うと、念仏して仏の法を中心に生きるという仕事です。そういう仕事を弥陀の本願は用意しているのです。

それは、48の本願（『大無量寿経』）の中の17番目の願いです。

たとい我、仏を得んに、十方世界の無量の諸仏、ことごとく咨嗟(ししゃ)して、わが名を称せずは、正覚を取らじ。

(真宗聖典 P.18)

ここで、「咨嗟(ししゃ)」というのは、褒めたたえるという意味です。弥陀の本願(=南無阿弥陀仏)を褒めたたえて念仏するということです。念仏によって目が覚めた人は、弥陀の本願(=南無阿弥陀仏)をほめたたえて念仏を称えてほしいという願いです。ただし、これは、衆生ではなくて諸仏に願われていることです。ですから、私たちが生きている間は、たとえ念仏を喜んだとしても、あの人の念仏は偽物だとか、あんな人の念仏なんて信用できないとか言われるのだと思います。しかし、私たちの寿命が尽きれば、それが諸仏の願いとして、人をたすけることになるのです。

私も、生きている間は、こんな本を書いてもあまり読んでくださる人はいないと思います。罪悪深重煩惱熾盛の身ですから、あんな人間の言うことは信用できないとなります。しかし、命終われば、生前、その人がほんとうに大切にしていたものだけが残るように思うのです。実際、私の父も、亡くなってみれば「念仏ひとつ」と言い続けた人生が残りました。そして、私には、父がなぜ「念仏ひとつ」と言っていたのか、それがずっと問いとして残り、それがやがて私の目を覚ますことになったのです。すなわち、父の念仏が「南無阿弥陀仏」になって、私の目を覚ましたのです。父は57歳で亡くなりましたが、父は「南無阿弥陀仏」になってずっと私に寄り添っていたのだと、今さらながらにそう思います。

ですから、私たちのなすべき仕事は、念仏によって目を覚まし、弥陀の本願(=南無阿弥陀仏)を喜ぶ、それだけでいいのです。ただ弥陀の本願(=南無阿弥陀仏)を褒めたたえて念仏を称える、それはどんな境遇におかれてもできる仕事だと思います。何の善も作り出せない悪人でも、それだけはできるのです。それが、自己のすくいにもなり、他人をもすくうことになる、そのことを親鸞はこの第5条で言いたかったのではないかと思うのです。

5.3 父母の孝養

第5条では、念仏は先祖供養(父母の孝養)の道具ではないということも、一つのテーマになっていると思います。

現代社会でも、念仏は、葬式や法事の時に唱えるものと認識されているように思います。すなわち、念仏は、死者を弔うものと考えられているわけです。ですから、お墓参りでも、合掌して念仏する光景をよく見ますし、「南無阿弥陀仏」という文字が刻まれた墓石もよく見かけます。また、家庭に仏壇がある場合も、だいたいそこに位牌や亡くなった方の写真が置かれていて、亡くなった人の供養の意味で仏壇にお参りしている方も多いように思います。

それに対して親鸞は、この第5条で、念仏というのは、亡くなった人を供養するものではなく、今、この現実の中で苦しんでいる人をたすけるためにあると言っているように思います。

そもそも、親鸞の曾孫の覚如上人の『改邪鈔(がいじゃしょう)』という書物には、「親鸞、閉眼せば、賀茂河にいれて魚に与うべし。」と言

われたと書かれています。すなわち、私が死んだら、賀茂河に捨てて魚に食べさせないということですね。ですから、親鸞は、自分の葬式も必要ないし、墓も必要ないと言っておられたのだと思います。親鸞からすれば、死んだら「南無阿弥陀仏」になって、有縁の人をたすけてまわるわけですから、当然、墓など必要ないのです。「私のお墓の前で泣かないでください〜。そこに私はいません〜。眠ってなんかいません〜。」の歌そのものです。死んだらすぐに「南無阿弥陀仏」になって、私たちの目を覚まそうと飛びまわるのです。眠っている暇などないのです。

ですから、親鸞の教えでは、墓も必要ないし、葬式や法事も必要ないのだと思います。大事な人が亡くなったら、その亡くなった人は、すぐに弥陀の本願（＝南無阿弥陀仏）になって、私たちに寄り添い、私たちにいつも呼びかけているのです。

しかし、墓や葬式や法事が無くなるとお寺は困りますよね。ですから、親鸞の教えは、お寺にとってはあまり都合のよい教えではないのだと思います。それで、平野修先生は、生前、「親鸞の教えを宗教と言うなら、他の宗教は宗教ではない、また、他の宗教を宗教と言うなら、親鸞の教えは宗教ではない」と言われていました。

ですから私は、親鸞の教えは、哲学に近いように思うのです。仏の法に目覚めることと、プラトンのアイデアを見ることは同じことを言っているように思うのです。ただ一つ異なる点は、それが自力なのか他力なのかという点です。親鸞の教えは、私たちを目覚めさせるのは他力だと言っています。ハイデッガーの言い方を借りれば、「存在からの呼びかけ」によって、私たちは、自我の迷妄に目が覚めるということです。そして、

その「存在からの呼びかけ」こそが「南無阿弥陀仏」という言葉なのです。（これは、大谷大学の加来雄之先生から教わりました。）

5.4 まとめ

この『歎異抄』という書物は、書かれた後 200 年間、一般にはほとんど知られていなかったそうです。ですから、これは意図的に隠されていた可能性もあります。要するに、この書物が世の中に広まると困る人がいたわけです。親鸞にとっては、お寺も、墓も、葬式も、法事も必要なかったのだと思います。また、親鸞と共に生きた人たちは、「いし・かわら・つぶてのごとくなるわれら（真宗聖典 P.553）」ですから、お寺への寄付もできず、葬式も法事もしてもらえないような人たちだったのかも知れません。そして、親鸞は、そういう悪人こそ、弥陀の本願の対象だと言っているのです。

親鸞の言う悪人は、現代で言えば、孤独死をする人かも知れません。そういう人は、葬式も、法事もしてもらえず、当然、墓もなく、だれも供養してくれる人もいません。しかし、親鸞の教えは、そういう人であっても、仏に成ることはできると言っているのです。ただ、自我の迷妄に目覚め、念仏して、弥陀の本願を喜び、与えられたいのちを精一杯生きる、それで安心と満足と納得の人生が与えられると。そこには、たとえ孤独であっても、すべてのいのちとひとつにつながっている浄土が与えられるわけです。そして、いのち尽きれば、その浄土の一員として迎えられ、すぐに「南無阿弥陀仏」になって、同じ孤独に苦しんでいる人をたすけに行くのです。この第5条には、何かそんな暖かさを感じます。

第6条

一、

専修念仏のともがらの、「わが弟子ひとの弟子」といふ相論のさふらふらんこと、もてのほかの子細なり。親鸞は弟子一人ももたずさふらふ。そのゆへは、わがはからひにて、ひとに念仏をまうさせさふらはばこそ、弟子にてもさふらはめ。ひとへに弥陀の御もよほしにあづかて、念仏まうしさふらふひとを、わが弟子とまうすこと、きはめたる荒涼のことなり。

つくべき縁あればともなひ、はなるべき縁あればはなることのあるをも、「師をそむきて、ひとつにつれて念仏すれば、往生すべからざるものなり」などいふこと、不可説なり。如来よりたまはりたる信心を、わがものがほにとりかへさんとまうすにや。かへすがへすもあるべからざることなり。

自然のことはりにあひかなはば、仏恩をもしり、また師の恩をもしるべきなりと云々

(出典：<http://web.otani.ac.jp/tannisyo/>)

【私なりの現代語訳】

念仏の教えを聞く人たちの中で、「私の弟子だ。他人の弟子だ。」というような言い争いがあるようですが、それは思いもよらない話です。私（親鸞）は、弟子一人も持っておりません。その理由は、私の力によって、人が念仏申すようになったのなら弟子ということもあるかも知れませんが、弥陀の本願の働きで、自我の迷妄に目が覚めて、念仏申すようになった人を私の弟子だというのはまったく意味のない話です。

縁があれば共に念仏の教えを聞くこともあり、縁がなければ互いに距離を置くことがあるのが道理で、それを「師に背いて、他の人に師事して念仏するような者は、浄土に往生できない」などと言うのはもってのほかです。弥陀の本願（＝南無阿弥陀仏）の働きで目が覚めたものを、自分がその人を目覚めさせた、本願の働きを自分のものだとも言うのでしょうか。そんなことはあってはならないことです。

放っておいても、弥陀の本願（＝南無阿弥陀仏）の働きによって目が覚めれば、仏の恩を知り、師の恩を知るようになるのです。

6.1 わが弟子ひとの弟子

第6条は、学生にとっては少し縁遠い話かも知れませんが、教員である私にとっては耳の痛い話です。仏教に関しては、私は人に教えを説くような立場にないので、この条にあるようなことは経験がないのですが、大学のゼミ配属では、これとよく似た経験をします。すなわち、優秀な学生の取り合いになるわけです。

内の大学では、3年生の前期後半に学生のゼミ配属が決まります。そして、3年生の後期から4年生の卒業研究まで1年半の指導をします。また、その中から大学院に進学する学生もいるので、そういう学生とは修士2年を合わせて3年半の付き合いになります。それで、学生の勉強意欲が教員の研究意欲にも影響するので、教員の方は、勉強意欲のある優秀な学生がほしいわけです。

そうすると、優秀な学生がゼミ配属の面談に来たら、自分のゼミに志望を向けさせようと、「他のゼミに行ったら大変な目にあうぞ」みたいな

ことを言うわけです。私も最近はあまり言いませんが、「意匠系の研究室に行っても就職はないぞ」とよく言っていました。実際、デザイン関係の仕事は、ライバルが多いわりに就職先が少ないので、就職は容易ではありません。特に、建築家が主催するアトリエ系の事務所は、給料は安いし、離職者も多いことから、学生の方にも余程の覚悟が必要です。ですから嘘をついているわけではないのですが、本音のところでは、内のゼミに来てほしいという欲があるわけです。

結局のところ、優秀な学生が来て、大企業や優良企業に就職すれば、その指導教員が優秀ということになりますから、私なんかも、自分のゼミの卒業生の就職先をホームページにずらっと掲載して、「内のゼミはこんなにすごいのだ」と宣伝しているわけです。そして、成功した卒業生がいると、「私が彼を指導した」と自慢してまわるのです。まあ、本当に愚かな話です。

この第6条によれば、それは、たまたま縁があって自分の研究室に来ただけで、教員の力など関係ないということですね。実際、学生がよい就職先に内定を得るのも、学生の本来の力であって、教員の指導力などほとんど関係ないのです。それをわがもの顔に、自分の力で就職させてやったと勘違いするのですから手に負えません。まあ、それは娑婆の話なので、当然と言えば当然なのですが、それが、念仏の教えを聞く人の中にも起きるということです。

6.2 はなるべき縁あればはなるる

以下では、少し個人的な話になりますが、自分の経験をもとに第6条を読み解いてみたいと思います。

私の場合、自分の弟子が離れたという経験はないのですが、私自身が、師（先生）から離れたという経験はあります。前著にも述べたように、私は、大学時代から細川巖先生の教えを聞き、細川先生の教えで目が覚めたのですが、その後、平野修先生に出会ってからは、平野先生に惚れ込み、平野先生の教えを中心に聞くようになりました。それでも、細川先生が生きておられた時は、細川先生はあまり気にされることもなく、それこそ、わが弟子、ひとの弟子というようなことは言われませんでした。しかし、細川先生が亡くなった後は、そういう雰囲気はなくなり、「師に背いて、他の人に師事して念仏するような者は浄土に往生できない」というような暗黙の圧力を感じるようになりました。

そして、ある仏教の会で、自分で勉強したことを話す機会があったのですが、そこで、細川先生が説かれていたことと、親鸞が『教行信証』で説かれていることは違うのではないかと行ってしまったのです。親鸞は自力を否定しているのに、細川先生は自力を肯定され、自力を尽くした後他力にたのむと話されていたが、それは親鸞の言っていることとは違うのではないかと。そうしたら、たちまち非難ごうごうの嵐が吹き荒れ、結局、それは私の独断ということで片付けられました。しかし私は、どうしてもそれに納得ができず、ついには、共に細川先生の教えを聞いていた人たちとは距離を置くようになったのです。

ですから、師の方が「弟子一人も持たず」と言っても、師の教えを聞いた人たちが、弟子の意識を持つということです。そして、その師の教えがいつのまにか絶対化され、親鸞の教えよりも大事になってしまうのです。私は、それが自力の教えの特徴ではないかと思うのです。結局は、師の教えを「私」を支える杖にしているので、それを否定されると困る

のです。要するに、立っている場が「浄土」ではなく「私」という自我だということです。

ですから、そういう人たちの批判は、まだ勉強が足りていないとか、人生経験が足りないとか、独りよがりの悟りだとか、すなわち、第1条の言葉で言えば、「老少善悪」を選ぶわけです。自力を立てれば、必ずそうなります。そして、『教行信証』は、一言一句、丁寧に読まなければ、親鸞の意図を読み誤ると言うのです。しかし私は、親鸞の教えは、信心を抜きにしては読めないと思うのです。人間は、自分の思いの方向で教えを解釈しますから、思いを破られた経験がない人が、いくら親鸞の書かれたものを読んでも、それは思いの中に取り込まれてしまうのです。

そのような人間の思いを破ってくるのが、仏の法である南無阿弥陀仏です。弥陀の本願（＝南無阿弥陀仏）が、私の思いを破り、「私」に執着して、自他ともに苦しめていることを照らし出すのです。それは、第4条、第5条にもあるとおり、仏（阿弥陀仏）の力であり、私たちの力ではないのです。ですから、細川先生も、生きていく限り間違えることもあるのです。親鸞の息子の善鸞でさえ「専修賢善」を信仰するようになったのですから、それだけ自力の教えは魅力的なのだと思います。私たちは、幼いころから賢善精進の教えを叩き込まれて成長してきたので、他力の教えには興味も示しません。ですから、まずは、がんばって立派な人になろう、誰からも尊敬される人になろう、仏教はそんな教えだと言いたいのです。

しかし、法然も親鸞も、自力の教えでは、仏の法を覚えることは不可能だと言い切ったのです。それは、自力では人間の「思い」を破れないから

です。結局は、「私」というものが尊く立派になるという杖を手に入れるだけで、それはそのまま、仏を疑っている姿にほかならないのです。疑いの城に閉じこもって、自己満足に浸っているにすぎないのです。

6.3 つくべき縁あればともなひ

私の方も生きていく身なので間違えることはあります。しかし、私たちの目を覚ますのは、仏の法（南無阿弥陀仏）です。これは親鸞の確信なのです。なぜ確信かと言えば、第2条にもあるように、親鸞も仏の法（南無阿弥陀仏）によって目が覚めたからです。念仏によって「思い」を破られたからこそそう言えるのだと思います。ですから、念仏の教えは、念仏によって目が覚めた人から聞くのが原則だと思います。ですから私も、細川先生と平野先生が亡くなった後、次にどういう先生の教えを聞くべきか悩みました。そして、たまたま縁があって、大谷大学の一楽真先生の教えを聞くようになったのです。すなわち「つくべき縁」があったのだと思います。

それはちょうど共に細川先生の教えを聞いてきた人たちから距離を置き始めた頃でした。一楽先生の研究室の卒業生で、昔からの友人であった岡田克也氏（現、島根県法蔵寺住職）が、広島に一楽先生を招いて、誰もが気軽に仏教を聞けるような会をやらないかと言いついたのです。それが縁で、岡田氏と数人の仲間と「こころ生き生き元気塾」という会を始めました。それは3年後には「浄土論註に学ぶ会」に発展し、さらに10年後には「正信偈に学ぶ会」となり、今年（2020年）で16年目を迎えます。

この会は、どこの教団にも属さず、ただ、一楽先生の講義を聞きたいという有志が集まって運営している会で、最初の10年間は広島の中新聞社ビルの会議室を借りてやっていたのですが、中国新聞社が会議室の貸し出しをやめたので、その後は、真宗大谷派広島別院に会場を移してやっています。年に4回一楽先生に広島に来ていただいて、午前中2時間、午後2時間の講義を聞くのですが、最近では毎回40名近い人が集まるようになりました。

ちなみに、こういう仏教の教えを聞く会を「僧伽（サンガ）」と呼ぶのですが、教団に属さなくても、仏教を説く先生とそれを聞く仲間さえいれば、自然とサンガは成り立つものだと思います。そして、この会は、聞きたくなったらいつでも聞きに行けるし、聞きたくなければいつでもやめられます。1日4時間の講義で2千円の会費が必要ですが、それ以外は何の拘束もありません。ですから、私も半数以上は知らない人で、横のつながりはあまりありませんが、それも現代社会には合っているのかなと思います。

それでも、15年も経つとサンガも成熟してくるもので、一昨年末、一楽先生が急用で広島に来られなくなったことがあって、急遽、私が代講を務めたのですが、4時間の講義はあっという間でした。それだけ聞く力のある人、すなわち、日頃の生活で、不安や不満や後悔に苦しんでいる人が集まっているということです。私もその一人ですが、一楽先生の講義を聞いて元気をもらうのです。3か月に一回ですが、一楽先生はそれくらいで十分だと言われます。3か月間、煩惱に覆われて見えなくなったものを、一楽先生の話聞いて思い出すのです。いわゆる、砂漠のような現実を生きる上でのオアシスのようなものです。

一楽先生は、年4回の日曜日に、わざわざ京都から広島まで足を運んで来られるのですが、15年間、「そろそろやめようか」と言われたことは一度もありません。それで15年も続いたのですが、結局、聞く人の喜びが、話す人の喜びにもなるのだと思います。すなわちサンガは、説く人だけではなくて、聞く人がいてはじめて成り立つということです。（代講してみてそれがよくわかりました。）

ですから、私は、細川先生の築かれたサンガからは離れましたが、一楽先生という師を得て、また新しいサンガを与えられたのです。ですから「つくべき縁あればともなひ、はなるべき縁あればはなるる」ということです。要するに、自分に合った先生の教えを聞くべきだということです。自力の教えが好きなら、まずはそういう先生の教えを聞けばよいと思います。しかし、これは違うかなと思ったら、先生を変えることもあるということです。すなわち、念仏の教えに関しては、師（先生）に縛られる必要はないということです。この第5条はそんなことを言っているのではないかと思うのです。

6.4 師の恩をもしるべきなり

上述したように、私は、共に細川先生の教えを聞いてきた人たちとは距離を置くようになったのですが、それが本当に師の恩に背くことなのでしょうか？ その点について考えてみたいと思います。

私は、細川先生の後を継がれた先生方からは、釈迦に背いたダイバダッタのような存在だと思われています。しかし、私は、細川先生の信心を疑っているわけではありません。ただ、細川先生が説かれた教えに固執することに問題があると言っているのです。

私は、細川先生は、龍樹と善導と蓮如の影響を強く受けられていると思います。ですから、自力を尽くした後に他力にであうという言い方は、善導の教えにもとづいているように思うのです。善導の『観経疏』を読めば、まさに細川先生の言われるとおりでと思います。しかし、その善導の教えによって目が覚めた法然は、自力の行は必要ないと言い切られたのです。法然の教えは「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」ですから、私たちが仏の法に目覚める手段は、念仏より他には無いのです。そして、親鸞も、その法然の教えで目が覚めるわけですから、法然と親鸞の教えは、「ただ念仏」で貫かれているのです。それは、この『歎異抄』という書物を読んでも明らかだと思います。

しかし、法然の死後、念仏の教えは様々に誤解され、浄土というのは、善行を積めない悪人のための仮の仏土だと言われるわけです。要するに浄土の教えは、仏教の傍流であって本流ではないと。それに反論するために書かれた書物が『教行信証』です。ですからこれは、第3条で言う善人（自力作善の人）の誤解を解くために書かれた書物なのです。そして、親鸞は、この中で、釈迦（経典）、龍樹、天親、曇鸞、道綽、善導、源信、源空（法然）の文献を挙げて、念仏こそ仏の法を覚る唯一の方法だということを明らかにしていくのです。そして、その文献の中に出てくる自力の行はすべて方便とし、真実と方便の違いを明確化するのです。その中で親鸞が言っていることは、自力の行をいかに尽くそうとも、真実には至らないということです。必ずそこには疑いが残ると言うのです。そして、その疑いを破ってくるものこそ、弥陀の本願であり、南無阿彌陀仏という念仏なのです。

細川先生は、福岡教育大学を早期退職され、そこから龍樹の『十住毘婆沙論』、天親の『浄土論』、曇鸞の『浄土論註』、道綽の『安楽集』、善導の『観経疏』、源信の『往生要集』、法然の『選択集』と、それぞれの原典を一言一句丁寧に読み解いていかれたので、肝心の親鸞の『教行信証』を読み解かれるまで寿命が持ちませんでした。ですから、細川先生の教えを中心に聞かれた方は「ただ念仏」にはならないのです。まずは、定期的に仏教の話聞き、毎日勤行し、仏書を読み、生活を正し、仏の恩、師の恩に報謝していく、そういう行を積み上げていくうちに、本願や念仏の意味が少しずつわかっていく、そういう教えです。すなわちそれは、第3条の善人（自力作善の人）のための教えで、悪人のための教えではないのです。

ですから、そういう教えでは、第3条の悪人は、本当の悪人ではなく、悪人の自覚がある善人です。勤行をやってみただけでも続かない、念仏も出てこない、世間のことにかまけて仏教の教えもあまり聞けていない、ああ自分はダメな人間だという悪人です。しかし、そういう悪人は、自力無効の悪人ではないのです。単に自己反省をしているだけです。ダメだと言っている自分に酔っているだけなのです。なぜそう言えるのかと言えば、まさに自分がそうだったからです。

しかし、そういう教えは、悪人には通用しないのです。たとえば、鬱病に苦しんでいる人が「まずは仏教を聞きましょう」と言われても、間に合わないのです。「勤行をしましょう」と言われても、そんなことに意味があるとは思えません。ですから、そういう教えは、自力で善を作り出せる人には通用しますが、何の善も作り出せない悪人には通用しないのです。

ですから、悪人のための教えは、「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし」なのです。共に念仏申しましょう。これだけです。要するに、「私も同じですよ」ということだと思えます。私も「私」という自我に苦しめられ、地獄のような日々を送っていますということです。ですから、共に念仏して、「私」から解放され、浄土を与えられ、生きる力をもらって、この難度海と呼ばれる人生を生き抜いて行きましょうと。そう言えるのが他力の教えだと思えます。

私は、細川先生は、自分の教えに留まることなく、親鸞の教えを学び、弥陀の本願に目覚めてほしいと願われていると思うのです。そうでなければ、信心の人は生まれられないわけですから、それは細川先生の本意ではないはずで、すなわち、師の恩に報いるというのは、師の教えに忠実に従うことではなく、弥陀の本願（＝南無阿弥陀仏）によって、自我の迷妄に目が覚め、念仏を喜び、縁のある人と共に念仏申して生きることだと思えます。

亡くなられた細川先生はすでに南無阿弥陀仏になって私たちに寄り添われていますから、私には「君は、君の道を行けばいい」と言われているような気がします。「君は、悪人のたすかる道をたずねて行けばいい」と。そして、細川先生の後を継がれた先生方には、「善人がたすかる道をたずねて行けばいい」と。それぞれ道は違って、行き着く先は、弥陀の本願（＝南無阿弥陀仏）ですから、それぞれの道を歩めばいいのだと思えます。

人間は、生きている間は、みな凡夫です。そして、細川先生の人生を振り返ると、まさに念仏を喜ばれた人生だったと思うのです。第9条の「他

力の悲願はかくのごときのわれらがためなりけり」という言葉をいつも口にされ、「こんなていたらくな私、南無阿弥陀仏」と念仏されていました。ですから、細川先生は、すでに「南無阿弥陀仏」となって、私たちに目を覚ませと呼びかけられているのです。「藤井君、つまらんことでいつまでも喧嘩をしている場合ではないぞ」と、何かそんな声が聞こえてきそうです。

6.5 まとめ

第6条の解説は、私的な内容に終始してしまいましたが、第6条の背景には、これと同様の問題があったように思うのです。このような問題は、ある意味教団の宿命と言ってもよいかと思えます。すなわち、すくう主体が仏の法（南無阿弥陀仏）ではなく、人（師）になるということです。そしてそうすると、師が絶対化され、それを批判するものを許さない体質が生まれます。親鸞は、第6条で、そういう教団の体質を戒めているように私には読めます。すなわち、批判を受け入れなくなったら、その教団は、親鸞の教えからは外れているということです。

これは、学生にも知っておいてほしいことです。仏教を名乗る教団は、沢山ありますが、そこで説かれる教えを絶対化し、カリスマ的な教祖を立てているようなところには近づくなかれということです。少なくとも、浄土真宗である限り、どんな偉い先生であろうと生きている間は凡夫なのですから。

第7条

一、

念仏者は無碍の一道なり。そのいはれいかんとならば、信心の行者には、天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし。罪惡も業報を感ずることあたはず。諸善もをよぶことなきゆへに、無碍の一道なりと云々

(出典：<http://web.otani.ac.jp/tannisyo/>)

【私なりの現代語訳】

念仏によって目が覚め、仏の法に依って生きる者は、何ものにもさまたげられない一筋の道を歩むことができます。その理由は、仏の法に目が覚めた者には、天の神・地の神も敬ってひれ伏し、恐れを抱かせるものや他の道に誘惑するものにも惑わされることがないからです。また、自らが犯した罪に対しての後悔からも解放されます。このように、弥陀の本願(=南無阿弥陀仏)は、人間が作り出すどのような善をも超えているがゆえに「無碍の一道」なのです。

7.1 念仏者は無碍の一道なり

「無碍」というのは、障害がない、邪魔するものがないという意味ですが、この言葉は、念仏者は、障害がない、楽で幸せな道を歩むという意味でしょうか？ 私は、それは少し違うように思うのです。

この「無碍の一道」という言葉は、前著にも述べた、善導の『観経疏』の中にある「二河譬(にがひ)」に出てくる「白道(びやくどう)」の

意味だと思います。そこでここでは、この善導の「二河譬(真宗聖典 P.219 ~P.221)」について考えてみたいと思います。

この善導の「二河譬」は、48の本願(『大無量寿経』)の内の18番目の願いの解釈として出てくるのですが、これまで、48の本願の中心とも言えるこの18願(選択本願)を示していなかったのも、まず、この18願を以下に示し、私なりの説明を加えてみたいと思います。

たとひ我、仏を得んに、十方衆生、心を至し信樂して我が国に生まれんと欲(おも)うて、乃至(ないし)十念せん。もし生まれずば、正覺を取らじ。唯(ただ)五逆(ごぎゃく)と正法(しょうぼう)を誹謗(ひぼう)せんをば除く。

(真宗聖典 P.18)

ここで、「心を至し信樂して我が国に生まれんと欲うて、乃至十念せん。」のところが、信心・念仏の願と言われるゆえんです。これは、漢文の読み下し文ですが、元の漢文は、「至心信樂(ししんしんぎょう)、欲生我国(よくしょうがこく)、乃至十念(ないしじゅうねん)」となります。これを平野修先生の教え(P.23)にあてはめると、「至心」は「真実(まこと)」です。「信樂」は「めざめる」です。そして、「欲生我国」は、「やさしくなる」です。すなわち、「真実(まこと)に会えば、人はめざめる、人はやさしくなる、この道理を南無阿弥陀仏という」になるわけです。すなわちこれは、信心の内容を表しているわけです。

もう少し具体的に言うと、「真実」は、罪惡深重煩惱熾盛の我が身という真実です。「信樂」は、それに目が覚めたということです。そして、「欲生我国」は、それによって生きる意欲が与えられたということです。すなわち、浄土を与えられたということです。

次の「乃至十念」というのは、上限十回くらい念仏するという意味です。乃至というの、上下の限界を示して間を省略する言葉で、ここでは、一回から十回までという意味です。ですからこの願は、十方の衆生に、真実を届け（至心）、それによって目を覚まさせ（信樂）、浄土を与え（欲生我国）、「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、・・・」と念仏を称えさせたい（乃至十念）と願っているのです。

さらに補足すると、この「至心信樂、欲生我国」の信心は、どのようにして与えられるのかと言うと、それも念仏（南無阿弥陀仏）によって与えられるのです。なぜそう言えるのかと言えば、それは、この18番目の願いが成就された文（成就文）から読み取れるわけです。その18願の成就文をその前の17願（P.73 参照）の成就文と合わせて示します。

「十方恒沙(ごうじゃ)の諸仏如来、みな共に無量寿仏の威神(いじん)功德の不可思議なることを讃歎(さんだん)したまう。」(17 願成就文)

「あらゆる衆生、その名号を聞いて、信心歡喜せんこと、乃至一念せん。心を至し回向したまえり。かの国に生まれんと願ずれば、すなわち往生を得て不退転に住す。唯五逆と誹謗正法とを除く。」(18 願成就文)

(真宗聖典 P.44)

ここで、18 願成就文の「その名号（南無阿弥陀仏）」というの、17 願成就文の諸仏が無量寿仏(阿弥陀仏)をほめたたえて念仏する声です。そして、諸仏というのは、P.73 で説明したように、その人生で阿弥陀仏をほめたたえて生きた人たちのことです。私にとっては、親鸞聖人、細川先生、平野先生、児玉先生、父などがそうです。そういう人たちが阿弥陀仏をほめたたえて念仏する、その声を聞いて私たちの目が覚めるのです。すなわち、信心が与えられるということです。

そしてここでは、「乃至一念せん」と下限一回くらい念仏するとなっています。要するに、目が覚めたら「南無阿弥陀仏」となるのです。そしてそこから、「かの国に生まれん」と願う人生、すなわち、念仏を称え、その声によって目を覚まし、そこから、与えられたいのちを大切に生きていくという人生が始まるのです。それを「往生を得て不退転に住す」という言葉で言っているように思います。

そして、話を元に戻すと、善導の「二河譬」は、この18 願の「欲生我国」の解釈のところにでてくるのです。この二河というのは、「火の河」と「水の河」で、「火の河」は人間の「瞋憎(しんぞう)」（怒り憎しみ）を表し、「水の河」は人間の「貪愛(とんあい)」を表します。前著にも述べましたが、平野先生は、「火の河」は、怒りによって相手を焼き尽くす行為、「水の河」は、相手を飲み込んで無視する行為だと言われました。いずれも相手を消し去る行為です。すなわち、私たちは、日々の人間関係の中で相手を消し去って生きているということです。そして、この「二河譬」では、その「火の河」と「水の河」の中間に「白道(びやくどう)」があると言うのです。善導は、この「白道」を「清浄願往生の心」と言うのですが、これが18 願の「欲生我国」ですね。平野先生の言葉で言えば「人はやさしくなる」です。要するに、人間関係が回復するということです。消し去った相手がまた見えるようになるということですね。

また、善導は、この「火の河・水の河」の幅も「白道」の長さも共に百歩(人生の長さ)だと言うのです。そして、この河は、南北に流れていて、東の岸と西の岸があるのです。ですから「白道」は、東岸から西岸に渡る橋のようなもので、その橋は、幅が四五寸しかなく、いつも火の

河（瞋憎）や水の河（貪愛）で覆われているのです。そして、西岸は「極楽宝国」を表すと言うわけですから、西岸は「浄土」です。ですから、「白道」は、火の河や水の河に覆われながら、浄土まで一直線に続く道なのです。そして、その長さは人間の一生です。

ですから、この第7条の「無碍の一道」は、この二河譬の「白道」のことを言っていると思うのです。要するに、念仏者には、この「白道」が与えられるということです。したがって、これは、どや顔で風を切って歩くような道ではありませんね。常に、火の河や水の河で覆われているのです。その中にかすかに見える白い道です。しかし、その白道は、消えないのです。信心を得て白道に立ったなら、必ず浄土に至ることができる。念仏者には、そういう「無碍の一道」が与えられるということです。

7.2 天神地祇も敬伏し魔界外道も障碍することなし

次の「信心の行者には、天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし」ですが、ここでは、「念仏者」を「信心の行者」と言い換えています。「天神地祇も敬伏し」というのは、第5条の「一切の有情は、みなもて世々生々の父母兄弟なり」と通じているように思います。要するに、私たちのいのちは、すべての生き物のいのちとつながっており、それは、地球のいのち、果ては宇宙のいのちともつながっているわけです。私たちは、そういういのちの一つの細胞であり、それぞれが与えられた使命を果たすべくこの世界に存在しているのです。「天神地祇」というのは、そういういのちの源を表しているように思うのです。ですから、天神地祇が敬伏するというのは、そういういのちの源が、念仏者の誕生を喜ん

でいるということです。それを「天神地祇も敬伏し」という言葉で表しているように思います。

次に、「魔界外道」ですが、これは、善導の二河譬では、「群賊悪獣」に相当すると思います。この「群賊」というのは、「別解（べつげ）・別行（べつぎょう）・異学・異見の人」を言うのですが、これが「外道」です。「悪獣」は、「衆生の六根・六識・五蘊（ごうん）・四大（しだい）に喩（たと）える」とあるのですが、これが「魔界」に相当するようには思います。「悪獣」の方は、言葉は難しいのですが、私たちの身体を成り立たせているものだと思います。なぜ「悪獣（魔界）」かと言えば、コントロールが効かないからです。わかりやすのは、いつ病気になるか、いつ死ぬかわからないということです。また、魔というのは、「魔が差す」と言われるように、一瞬の判断や行動を誤るという意味に使われます。浮気の言い訳なんかにも使われますが、要するに欲望をコントロールできなかったということですね。ですから、「魔界」というのは、理性のコントロールが効かない世界を言っているように思うのです。

また、二河譬では、行者が白道を少し進んだところで、東の岸から群賊らが呼び返すと言うのです。「仁者（きみ）回（かえ）り来たれ。この道嶮悪（けんあく）なり。過ぐることを得じ。必ず死せんこと疑わず。我等すべて悪心あつてあい向うことなし」と。すなわち、「帰ってこい、その道は大変だぞ、必ずどこかで挫折するぞ、私はお前のためを思っているのだ」と言って、東岸（娑婆世界）に呼び戻そうとするのです。これは、『歎異抄』第2条にもあるように、念仏の教えは様々に誤解され、「ただ念仏でたすかるなどまやかした」とか、「悪人が悪人のままたすかるはずはない」とか、「悪人がたすかる教えなど信じたら地

獄に落ちる」とか、あらゆる批判がまきおこるわけです。それは、現代においても同じで、「他力本願ではだめだ」と、そういう言葉が日常的に使われていますから、もし、子供が念仏者になると言ったら、皆が「やめとけ」と言うと思います。「もっと大きな夢をもて」とか、「もっと他にやることがあるだろう」とか、「浄土真宗の寺は貧乏でやっていけない」とか。念仏の意味も知らないのにそういうことを言います。

しかし、この第7条では、そういう「魔界外道」も、信心の行者が歩む道を阻むことはできないと言っているのです。要するに、一度、信心を得たならば、もう迷うことはないということです。「罪惡深重煩惱熾盛の我が身（常に水火二河に覆われた我が身）」に目が覚めるわけですから、魔が差すのは当然となるのです。私たちは、コントロール不能な煩惱を抱えているわけですから、縁しだいでどんなことをしでかすかわかりません。しかし、この身は、あらゆるいのちとつながっており、たとえ自分が死んでも、そこでいのちが終わるわけではないのです。そういう疑いようのない真実が与えられるのですから、「魔界外道」も太刀打ちできないということですね。

7.3 罪惡も業報を感ずることあたはず

次は「罪惡も業報を感ずることあたはず」ですが、これは、そもそも人間は「業縁の存在」だということです。すなわち、人間は、縁によっては何を考え、何をしでかすかわからない存在だということです。「業縁」は、『歎異抄』の第13条に出てくる言葉ですが、「さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし」ということです。ですから、私たちが犯罪を犯さないのは、そういう業縁がなかっただけで、業縁によ

っては、どんな犯罪者になってもおかしくないということです。要するに、私たちの理性によって煩惱をコントロールすることは不可能だということですね。しかし、これはなかなか納得しがたいことです。

「自分は、絶対に悪いことをしない」と言う人がよくいます。しかし、自分の子供がいじめにあって自殺したら、加害者を殺してやりたいという心は起きないでしょうか？ 逆に、自分の子供が、いじめの加害者だったらどうでしょうか？ そうなると、今度は、自分の子供は悪くない、いじめられる側にも問題があると、そんな心が起こってきませんか？ そして、自分の子供がいじめの加害者で、いじめられた子供が自殺してしまったらどうでしょうか？ 自分の子供を犯罪者として裁けるでしょうか？

そもそも、いじめ問題にしても、ハラスメント問題にしても、多くの場合、加害者には加害意識がないのです。相手によって、無意識にそういう自分が引き出されてくるのです。相手が生意気で、傲慢な人間に見えてしまうのです。ですから、少し根性を叩き直してやろうというような安易な気持ちからいじめが始まるのです。そして、気がついてみたら大ごとになっているわけです。ですから、いじめ問題に関しては、誰もが加害者になりえます。

また、夫婦間のDVの問題にしても、他人事ではないのです。だいたいは夫の方が加害者ですが、妻の方も、言葉の暴力によって相手を深く傷つけるということがあるのです。それで、夫の方は、口で言ってもわかってもらえないので、ついつい手が出てしまうのです。

ですから、人間が「業縁の存在」ということがわからなければ、いつでも人を裁くわけです。人を善と悪に分けて、「悪は排除されるべきだ」となるのです。しかし、業縁によって自分が悪人になったらどうでしょうか？ 「自分は、絶対に悪いことをしない」と思っている人でも、交通違反くらいはするのです。いくら気を付けていても、飛び出し事故なんかは防ぎようがありません。居眠り運転なんかも、場合によってはやってしまうのです。そうして人を殺してしまったら、それは立派な犯罪者です。ですから、「自分は、絶対に悪いことをしない」と言っている人でも、業縁で犯罪者になってしまうこともあるのです。

ですから、「業縁の存在」とわかることは、平野先生の「人はやさしくなる」に通じるのです。どんな悪人も裁けないのです。自分も縁さえあれば同じことをするかも知れないわけですから、その人を排除することはできないのです。それが、浄土というものだと思います。どんな悪人も、弥陀の本願の対象だということです。

ですから、信心の行者には「罪悪も業報を感ずることあたはず」です。業縁があればいつでも罪を犯してしまう身ですから、もし、罪を犯せば、ただ謝罪し、罪を償っていくしかないと腹をくくれます。それが、念仏の働きだということです。人間を「業縁の存在」として見抜いた上で立てられた本願ですから、そこに本願の働きが届くのです。そして、罪悪深重煩惱熾盛の我が身に目が覚め、そこに懺悔（さんげ）ができます。そしてそれは、浄土を与えられるからできるのです。ですから、仏の法（南無阿弥陀仏）は、人間に「真実」と「浄土」を与え、そしてどんな罪悪も引き受けていく道を与えるということです。

7.4 諸善もをよぶことなきゆへに

弥陀の本願（＝南無阿弥陀仏）は、人間に真実を届け、それに目覚めさせ、そして、浄土に通じる白道（無碍の一道）を与えるのです。それは、人間のどんな善行もおよばないということです。

第6条までの解説で述べたように、人間の善行（自力の行）は、「私」を支える杖になるだけで、「私」の正体（真実）を照らしだすものにはなりません。そして、「私」を中心にした生き方では、どこまで行っても安心と満足と納得は得られないのです。うまくいっている時は、それが得られているように思いますが、何かあったらすぐに吹き飛ぶのです。要するに、途中で道が無くなったり、道に迷ったりして、「無碍の一道」にはならないということです。

ですから、「無碍の一道」というのは、どんな諸善（自力の善）もおよばない、念仏者（信心の行者）にのみ与えられる道だということです。

7.5 まとめ

以上、「無碍の一道」というのは、決して楽な道ではありませんが、迷わないというのは、人間にとって大きなすくいだと思います。何が起ころうと、念仏申して生きていく。そう腹が決まれば、どんな苦難にであっても後悔はないわけです。すなわち、藤場先生の言われる不安と不満と後悔からの解放、これが「無碍の一道」なのだと思います。

第7条の解説は、いささか専門的になりすぎましたが、最近、仏教用語の意味はネット検索で簡単に調べられますので、それらを利用して読み解いていただければ幸いです。

第8条

一、

念仏は行者のために非行非善なり。わがはからひにて行ずるにあらざれば非行といふ。わがはからひにてつくる善にもあらざれば非善といふ。

ひとへに他力にして、自力をはなれたるゆへに、行者のためには非行非善なりと云々

(出典：<http://web.otani.ac.jp/tannisyo/>)

【私なりの現代語訳】

念仏(南無阿彌陀仏)は、念仏申して生きる人にとって、自らの行になるものでもなく、善になるものでもありません。念仏(南無阿彌陀仏)は、自分の力で行ずるものではないので「行に非ず」と言います。また、自分の力で作り出す善でもないので「善に非ず」と言うのです。

念仏(南無阿彌陀仏)は、弥陀の本願からの呼びかけ(他力)であって、私たちの自力を離れているがために、私たちの行にも善にもならないのです。

8.1 念仏は行者のために非行非善なり

第8条は、念仏は、私の行でもなく、私が作り出す善でもないと言っています。では、念仏とは何なのか？ それは「声」なのです。諸仏が仏の法(阿彌陀仏)をほめたたえる声です。私たちは、その「声」を聞いて、目が覚めるのです。

第4条、第5条では、私たちは、この世では煩惱を抱える身だけれども、命尽きて仏になったら「南無阿彌陀仏」になって有縁の人をたすけると書かれていました。ですから、私たちが称える念仏は、私の声ではありますが、それは、命終わって仏になった人(諸仏)の声でもあるのです。私にとっては、細川巖先生の声であり、平野修先生の声であり、児玉暁洋先生の声であり、父の声でもあるのです。その声が、「私」というものは「幻想」だと教えているのです。(「幻想」という表現は、佐野明弘先生に教えていただきました。) 確かなものは、仏の法であり、仏の法が「私」が幻想であることを照らし出すのだと。そして、そういう「真実」が私に届き、目が覚めることによって「私」の呪縛から解放される、それが念仏の働きなのです。「私」を支えることから解放され、どんな言い訳も必要なくなるわけですね。「私」を守らなくても、立っておれる大地が見つかるのです。それが「浄土」です。「私」は、いずれ崩れ去っていくものです。どんなに守っても、最後は死によって崩れ去ります。必ず終わりを迎えるものなのです。

そういう「諸仏称名」の声が聞こえるようになれば、それは、念仏だけでなく、ドラマや映画や漫画や文学や哲学からも聞こえてくるように思うのです。例えば、是枝裕和監督の『三度目の殺人』ですね。(まだ見ておられない方は、ぜひ見てください。) この映画の中の三隅高司は、30年前に殺人の罪を犯し、刑務所で無期懲役の罪を償って出所したのですが、そこにあったのは孤独と、またもや悪事に加担させられるという不条理な現実でした。そして、再び二度目の殺人を犯してしまうわけです。しかし、最初は、死を受け入れることができず、どうにか死刑を免れようとします。その弁護を引き受けたのが主人公の重盛朋章(福山

雅治)という弁護士です。そして、三隅高司はころころと証言を変えるので、重盛朋章は、この人の真実はどこにあるのかわからなくなります。それは、三隅高司の自我の迷妄を表しているように思います。三隅高司自身も、自分というものがわからないのだと思います。ドフトエフスキーの『罪と罰』と同じです。自分の罪がわからないのですね。なぜ、自分はこんな目に遭わなければならないのかということなのです。

映画では、徐々に三隅高司の悲惨な人生が明らかになっていきます。それで、重盛朋章は、なんとか三隅高司を死刑から救おうとするのです。そして、その中で、山中咲江という一人の少女が、三隅高司が殺した自分の父親からレイプされていたことを告白し、それを裁判で証言したいと言うのです。重盛朋章は、その証言があれば、三隅高司を死刑から救えるということで、三隅高司にそのことを話します。しかし、三隅高司は、突然、自分は殺していないと言い出すのです。

そして、裁判では、三隅高司が殺人を否認したことで、山中咲江の証言の意味がなくなります。そのため、山中咲江は父親からレイプを受けていたことは証言せず、結局、三隅高司の殺人の否認も根拠がないということで、三隅高司は死刑を宣告されるのです。

そして、重盛朋章は、三隅高司が証言を変えたのは、山中咲江が父親からレイプされていたことを証言台で告白することを止められるためだったと解釈するのです。しかし、そう言われた三隅高司は、「自分のような悪人がそんなことをするだろうか」と、それを否定します。そして、重盛朋章は、死刑にすべきではない三隅高司を死刑にしたという罪を背負うことになるのです。

是枝裕和監督は、この映画の真意は明らかにしていませんが、まさに文学ですね。私たちに問いを残したのです。主人公の重盛朋章は、死刑は三隅高司が自ら選んだのだと思いたいのです。そうすれば、自分が罪の意識から逃れられるからです。しかし、三隅高司は、それを否定することで、重盛朋章に問いを残すのです。それは、人が人を裁くことの重さを知りなさいということですね。

三隅高司自身も、山中咲江の父親を自らの裁きで殺したのです。そして、逮捕されて留置場に入るとき、一緒に暮らしていた小鳥を殺して土に埋め、そこにも十字架を残すのです。人に飼われていた小鳥は飼う人がいなくなると苦しむという理由で留置場に入る前に殺して埋めたのです。これも、三隅高司が生命（いのち）を裁いているわけです。人間は、そうやって人（生命）を裁くのです。殺されて当然という理由をつけて人を裁き、殺していく、それが人間の罪だというのがキリスト教ですね。そうやって人間は神の子キリストを十字架にかけたのですから。

ただ、この映画では、三隅高司が死刑を宣告された時、重盛朋章に握手して「ありがとうございました」と言うのです。それは喜びに満ちているように私には思えました。それは、三隅高司が死を受け入れることができたということを表しているように思います。山中咲江という一人の少女を救ったというたった一つの「善」によって、自分にも生きる意味を与えられたということですね。ただそれは、三隅高司自身は否定します。私は、それは「私」には一点の善もないということをおうとしてるように思うのです。要するに、それは「私」の善ではなく、神から与えられたものだということです。言い換えれば「他力」です。自分が作り出した「善」ではないと。

念仏というのも同じだと思うのです。悪人になって、「私」というものが滅びても、そこに滅ばないものがあつたということです。「私」は死刑になって滅びるけれども、そこに滅びない愛情を見つけたということです。映画の中でも、刑務所の窓に、三隅高司が一匹だけ殺さずに野に放った小鳥がよって来て鳴きます。それは、三隅高司が逃がした小鳥かどうかはわかりませんが、それは生命（いのち）からの呼びかけを表しているように思います。あなたは独りではないと。

是枝裕和監督の意図はわかりませんが、私は、この『三度目の殺人』でも、『歎異抄』の悪人のすくいが見事に表現されているように思うのです。そして、私にとっては、それは弥陀の本願であり、念仏の声として聞こえてきます。

また、ユヴァル・ノア・ハラリの『サピエンス全史』、『ホモ・デウス』を読んでも、念仏の声が聞こえてきます。人間の愚かさ、人間の罪があらわになり、その底に大悲（弥陀の本願）を感じます。そして、念仏の声が聞こえてくるように思うのです。

人間が神になり、容姿端麗、頭脳明晰、運動能力抜群、病気もせず、死ぬこともない人間を人工的に作り出せる時代がすぐそこまで来ています。そして、最後は、ロボットになるというのです。人間の意識を AI で学習させ、身体をすべて無機物で覆い、太陽エネルギーを直接吸収して生きる人造人間になるのです。そうすれば、どんな環境でも生きて行けます。月でも、火星でも暮らせるのです。空気も食料も必要としない完璧な人間です。そしてそうなってみて、人間は改めて問うのです。人間とは一体何だろうか？と。人間の欲望を追求した結果、人間はロボッ

トになった。それで幸せだったのだろうか？ 悩みも苦しみもない、プログラムでいくらでも快樂を与えられる。さて、私たちはそういう未来が本当にほしいのでしょうか？

そして、『サピエンス全史』、『ホモ・デウス』の中には、仏陀（ブッダ）の覚りが登場します。しかも、それは過去ではなく、未来を予測するところに登場するのです。児玉暁洋先生が、「当来人釈迦」ということを言われていましたが、釈迦は未来人だということです。私たちが未来に直面する問題をすでに解き明かした人だと。ですから、再び仏陀の教えに注目すべき時代がやってきたということです。私たちは、神になることを選択するのか、あるいは仏陀になることを選択するのか？ 神になって世界を支配する道を選ぶのか？ 仏になってすべての生命と共存する道を選ぶのか？ さて、未来の人類は一体どういう選択をするのでしょうか？

8.2 20 願の念仏

少し話を戻すと、念仏は、我が身の真実を明らかにするものとして聞こえてくるのですが、私たちは、そう簡単には、その真実を受け入れることはできません。特に、「悪人」は、自分の現実を受け入れることが難しいのです。例えば、鬱病になれば、鬱病が治った自分は受け入れられても、鬱病である自分は受け入れられないのです。病気が治った自分は受け入れられても、病気である自分は受け入れられないのです。ですから「悪人」は、どうにかその受け入れがたい自分を受け入れようともがくのです。そして、念仏の教えは、そういう藁をもつかむ人間のところに届いてくるのです。

そうすると、今度は、念仏を申している自分を受け入れようとするのです。こんな自分でも、念仏を申すことはできる、そういう自分を受け入れようともがくのです。親鸞は、そういう人間を「不定聚（ふじょうじゅ）」と言っています。これは、すでに述べた「正定聚（しょうじょうじゅ）」「邪定聚（じゃじょうじゅ）」に対する言葉です。「不定聚」というのは、定まらない聚（ともがら）という意味です。何が定まらないかと言えば「信心」が定まらないのです。念仏の声を聞きながら、弥陀の本願を疑っているということです。要するに、目が覚めていないのです。映画『マトリクス』で言えば、仮想現実の中で、「目を覚ませ」という声は聞こえているのですが、仮想現実から出ていないということです。そういう人間のすくいを表したのが、48の本願の内の20番目の願いです。

たとひ我、仏を得んに、十方の衆生、我が名号を聞きて、念を我が国に係（か）けて、もろもろの徳本を植えて、心を至し回向（えこう）して我が国に生まれんと欲（おも）わんに、果遂（かすい）せずんば、正覚を取らじ。

（真宗聖典 P.18）

この願では、「我が名号を聞きて」とあるので、すでに諸仏の称名を聞いているのです。そして、自分がたすかる道は念仏しかないと思って、念仏を申して浄土に生まれたいと願うのです。なお、ここで「徳本」というのは念仏（南無阿弥陀仏）の意味です。

例えば、病気で苦しんでいる人が、念仏の教えを聞いて、ああそうなのかと思って、必死に念仏を申して、どうかこの苦しみから解放してくださいと願うのです。しかしそれは、私の「思い」の方向で願っているわけですから、私の「思い」を破るものではなくて、「私」が崩れないよ

うに守ってくださいという願いになるのです。ですから、そこで生まれたいと願われている浄土は「真の浄土」ではなく「疑城胎宮」です。しかし、19願の「邪定聚」と違うのは、そこに定まらないということです。あくまで「不定聚」なのです。なぜ定まらないかと言えば、「念仏は、行者のために非行非善」だからです。要するに、頼りにならないのです。私の「思い」を満足するものにはならないということです。

次の第9条にも出てきますが、念仏しても喜びがわいてこないのです。苦しみも一向に無くなる気配がないのです。そこで私に残るものは「問い」です。そして、その「問い」が必ず自我の迷妄を覚らせるということです。それが、この20願の「果遂せずんば、正覚を取らじ」の意味だと思います。そしてこれが、19願と20願の大きな違いだと思います。19願では、「邪定聚」ですから、「疑城胎宮」に定まってしまうのです。これでよしとなるのです。要するに、病気になっても揺らがない「私」を作り上げてしまうのです。

私も、若き日に癌を宣告される前はそうでした。どんな苦しみが押し寄せてきても、それに揺らがない金剛心が信心だと思っていました。しかし、いざ死を前にすると、そうはならない自分がいたのです。「私」が崩れ去っていくことに耐えきれない自分がいたのです。いままで聞いてきた仏教は何だったのかと思いました。何の役にも立たないではないかと。しかし、そこにこそ念仏の声が届くのです。「私」に依るのではなく、「仏の法」に依りなさいという声が届き、「私」というものが幻想だったと目が覚めるのです。「正体不明、行先不明」の「私」を頼りにして生きていた我が身の真実が照らし出されるのです。

ですから 19 願のすくいというのはある意味悲惨です。私は、21 歳の時、余命半年と宣告されて目が覚めましたが、その宣告が正しかったら、21 歳で人生を終わっていたのです。結婚することもなく、子供の顔を見ることもなく、この人生を終えていました。そうかと言って、死の宣告が無ければ、一生「疑城胎宮」に閉じこもっていたかも知れません。ですから、私は、自力の行を人に勧めるということではできません。「がんばりましょう」という仏教には、距離を置かざるをえないのです。

私は、念仏の教えは、人生に行き詰まった時に聞けばよいと思うのです。したがって、自分の子供にも仏教を聞くことは強要しませんでした。ただし、諸仏の称名は聞かせるべきだと思うのです。内の娘は、手塚治虫の『ブッダ』や『火の鳥』、ミヒヤエル・エンデの『モモ』や『果てしない物語』で、念仏の声を聞いたのではないかと思います。息子も、手塚治虫のアニメは好きでした。それに何よりも、私たち親が何を大切に生きたかが大事だと思うのです。夫婦喧嘩の絶えない家庭だったかも知れませんが、仏法を聞き、念仏を大切に生きたということが、いつか子供たちが現実の壁に突き当たった時に、仏の法に耳を傾ける機会を与えらると思うのです。それが弥陀の本願の力だと思います。

ですから、私は、この 20 願の意味がなかなか理解できませんでした。確かに、父の「念仏ひとつ」の声が私に問い続けていたのは確かです。しかし、21 歳の時に受けた余命半年の宣告はあまりにも衝撃が大きく、20 願の迷いの自覚がないのです。しかし、幸いにも私の伴侶になってくれた妻がこの 20 願の意味を教えてくださいました。

妻は、曾祖母の念仏を聞いて育ち、20 代で山本仏骨という先生にであって、自己の問題を解決するのは念仏しかないとわかったのです。しかし、そこからずっと迷い続けました。毎日、念仏申して生きているのですが、「私」の支配からなかなか解放されないのです。一番は結婚した相手が悪かったのだと思います。若気の至りで、いつ死ぬかわからない相手と結婚しましたから、常に不安がつきまといまいます。そんな中で、念仏の教えだけは共に聞いてきました。ですから、妻も、自分をすくうのは念仏だけだということはわかっているのです。しかし、「私」が幻想だとは思えません。「私」が崩れたら生きていけないと思うのです。ですから、「私」を脅かすものを避け、「私」を脅かす社会を変えたいと願います。そういう生きざまを見て、20 願というのは、これなのかなと思いました。

親鸞は、この 20 願を「真門（しんもん）」だと言います。これは「仮門（けもん）」に対する言葉です。そして、『教行信証 化身土巻』で、「それ濁世の道俗、速やかに円修至徳の真門に入りて、難思往生を願うべし。（真宗聖典 P.346）」と言っているのです。ここで、「難思往生」というのは、18 願の往生である「難思議往生」に対する言葉です。「難思議」というのは、『歎異抄』第 1 条の「不思議」に相当します。すなわち、「思ってもみない形のすくい」です。これに対して、20 願のすくいは「思い」が破られていないのです。それでも親鸞は、真門に入ることを勧めるのです。なぜなら、人間の「思い」は、自力では破れないからです。20 願まで行けば、後は、本願の働きに任せるしかないのです。それが、「果遂の誓い」の意味だと思うのです。

ですから、20 願というのは、問いを抱えて歩むことだと思のです。ただし、歩みを止めてしまったら、それは「疑城胎宮」です。疑いの城に閉じこもることになります。ですから、念仏を申しつつ現実の問題にぶつかっていく、そこに必ず道は開けるといことだと思います。

妻も、私が死ねば目が覚めるのかも知れませ。落ちることを恐れるがあまり、自分を手放せないのだと思。それだけ、妻の「私(自我)」への執着は激しいといことです。

この辺は、男女の差もあるように思。人間の場合、狩猟採取民であった時代が長いので、男は、いつでも死を覚悟しなければならなかつた。しかし、女性は子孫を守るために危険を回避して生き抜く必要がありました。ですから、女性の方が「生存」に対する執着は強いように思。そして、生存するために、この身をコントロールしているのが「私」という自我意識ですから、女性の方が「私」への執着が激しいのではないかと思。これは差別というより本能に由来するものです。

それでも、妻は、時々目を覚ましたのではないかと思。あります。しかしまた深い苦悩に沈みます。そして、妻の浄土には、どうしても排除すべき人間がいる。それは、子供の生存を脅かすものです。また、自分の生存を脅かし、支配してくるものです。そういう人間は、妻の浄土には入れない。ですから、念仏がありがたいと思。う時はあつても、自分を脅かすものがあれば、すぐに吹き飛びます。ですから、念仏がありがたかつたり、そうでなかつたりと、行つたり来たりします。要するに定まらない。しかし、20 願は、「果遂の誓

い」ですから、いずれ目が覚める時が来るといこと。それは、常に念仏が「問い」として語りかけるといこと。そして、その問いが、仏の法をたずねるといことに繋がります。

そして、妻も、佐野明弘という先生にであいました。『観無量寿経』の主人公であるイダイケ夫人には、釈迦が直接説法に現れる。殺されるビンバシャラ王には釈迦の弟子が使わされる。それだけ女性の苦悩は深いといこと。佐野先生の苦悩は深いので、妻はそこに光を見出したのだと思。

そして、最近、ついに妻も目を覚ました。3年間佐野先生の教を聞いて、3年目にしてやっと「私」が幻想だつたとわかつた。「果遂の誓い」はやはり本当でした。随分、長いトンネルでしたが、妻の信心歓喜を見て、あらためて念仏の教の確かさを思い知らされました。

8.3 まとめ

まとめとして、『観無量寿経』という経典について少し補足しておきます。上述のように、この経典では、イダイケという女性が主人公。このイダイケは、夫である国王(ビンバシャラ)を息子(アジャセ)に殺されて、自分も夫を助けようとしたこと、息子に殺されそうになる。です。

しかし、善導の『観経疏』では、息子のアジャセが父親を殺す背景がある。それは、イダイケがアジャセを身ごもつたとき、ビンバシャラとイダイケは、一度は、そのアジャセを殺そうとした。今で言えば中絶。最近では、妊娠初期に、子供の遺伝子異常を調べ

られますが、そこで遺伝子の異常が見つければ、中絶という選択肢が与えられます。同様に、昔は占い師がいて、その子供の出生を占うのです。しかし、その占いは凶と出るのです（実際にはもっと長い物語があるのですが省略します）。それで、ビンバシヤラとイダイケは、子を産み落とす時にアジャセを殺そうとするのです（今で言う中絶ですね）。しかし、アジャセは奇跡的に生き残るのです。その生き残った赤ん坊を見たビンバシヤラは、殺すことを思いとどまり、愛情をかけてアジャセを育てるのです。

しかし、後に、釈迦の親戚でもあり、釈迦教団の後を継ぐ野望を抱いていたダイバダッタに、お前は生まれる時に両親から殺されかけたのだと知らされるのです。だから、お前が父の王を殺して王になれば、私も釈迦教団を引き継ぐから、二人でこの国を立派な国にしていこうと誘うのです。それでアジャセはダイバダッタの誘いに乗って、父の王を牢獄に閉じ込めて殺し、その父に密かに食料を運んで助けようとした母までも手にかけてやろうとするのです。

そして、父のビンバシヤラは、自分がアジャセを殺そうとしたのは事実なのだからアジャセに殺されるのは仕方がないと、釈迦の弟子の教えを受けて自分の死を受け入れるのです。しかし、イダイケの方は、自分が加害者であることは認めないのです。自分は、何一つ悪いことはしていないのに、なぜこんな目に遭わなければならぬのかと釈迦を問い詰めます。そもそも、貴方の親戚であるダイバダッタが息子を誘惑しなければ、こんなことにはならなかったと。このような被害者意識の塊であるイダイケがすくわれていく姿を描いたのが『観無量寿経』という經典なのです。

私は、この經典を読むと、自分は、ビンバシヤラだなと思います。ちなみに、ビンバシヤラの救いは、「阿那含果（あなごんか）」という小乗の救いです。男は自分がすくわれればそれで満足してしまうのかも知れません。それに対して、イダイケは、自分だけでなく息子のアジャセもすくわれていく世界を願うのです。

私の妻は、いつも未来がどうなっていくのかを心配します。原発問題や、再び戦争に向かいかねない日本の政治を憂えています。それも、子供たちの未来を心配しているのだと思います。ですから、女性のすくいは容易ではないのだと思います。しかし、一度目が覚めれば、それは間違いなく大乘のすくいですね。

現代は、女性の時代だと言われますが、確かにそうなのかなと思います。妻から言わせれば、私のすくいは二乗のすくいで、本物ではないといつも一括されます（笑）。

第9条

一、

「念仏まうしさふらへども、踊躍歓喜のころをろそかにさふらふこと、また、いそぎ浄土へまいりたきころのさふらはぬは、いかにとさふらふべきことにてさふらふやらん」と、まうしいれてさふらひしかば、

「親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじころにてありけり。よくよく案じみれば、天におどり地におどるほどによろこぶべきことをよろこばぬにて、いよいよ往生は一定とおもひたまふべきなり。

よろこぶべきころををさへてよろこばせざるは、煩惱の所為なり。しかるに、仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫とおほせられたることなれば、他力の悲願は、かくのごときのわれらがためなりけりとしられて、いよいよたのもしくおぼゆるなり。

また、浄土へいそぎまいりたきころのなくて、いささか所勞のこともあれば、死《し》なんずるやらんと、ころほそくおぼゆることも、煩惱の所為なり。

久遠劫よりいままで流転せる苦惱の旧里はすてがたく、いまだむまれざる安養の浄土はこひしからずさふらふこと、まことに、よくよく煩惱の興盛にさふらふにこそ。

なごりおしくおもへども、娑婆の縁つきて、ちからなくしてをはるときに、かの土へはまいるべきなり。いそぎまいりたきころなきものを、ことにあはれみたまふなり。

これにつけてこそ、いよいよ大悲大願はたのもしく、往生は決定と存じさふらへ。踊躍歓喜のころもあり、いそぎ浄土へもまいりたくさふらはんには、煩惱のなきやらんと、あやしくさふらひなまし」と云々

(出典：<http://web.otani.ac.jp/tannisyo/>)

【私なりの現代語訳】

「念仏を申しても、躍り上がって喜ぶような心も起きてきませんし、いそいで浄土に生まれたいという心もないのは、どのように考えたらよいのでしょうか」と親鸞聖人に質問したら、

「私（親鸞）も同じように不審に思っていたのですが、唯円房もおなじだったのでですね。よくよく考えてみれば、天に踊り地に踊るほどに喜ぶべきことを喜べないからこそ、いよいよ往生は一つに定まっているとと思うべきではないでしょうか。

なぜなら、喜ぶべき心を抑えて喜ばせないのは、煩惱の為す所です。しかし、仏は、それを見抜いた上で「煩惱具足の凡夫」と仰せられているので、他力の悲願は、このような我が身の真実を照らし出すためのものであったと、いよいよ頼もしく思われます。

また、いそいで浄土に生まれたいという心もなく、少しでも病気の心配があれば、死ぬのではないだろうかと不安に思うのも、煩惱の為す所です。

はるか遠い昔から今日まで流転を繰り返してきた苦惱のこの身は捨てがたく、未だ生まれたことがない極楽浄土が恋しく思えないのも、よくよく煩惱が盛んだということです。

この世が名残惜しく思っても、娑婆（この世）の縁が尽きて、生きる力が無くなった時に、浄土には生まれるのです。他力の悲願は、いそいで浄土に生まれたいという心がない者を、特にあわれんでおられるのです。

ですから、このような我が身だからこそ、いよいよ大悲大願は頼もしく、往生は定まっていると知るべきなのです。躍り上がるほどの喜びがあり、いそいで浄土に生まれたいと思っている時には、煩惱はどこに行ったのだろうかと怪しく思うべきですね。」と仰せになった。

9.1 念仏によるすくい

第9条は、念仏申しても喜びがわからない。また、いそいで浄土に生まれたいという心もない。これはどうしたことだろうかという疑問ですね。

この文章で「踊躍歡喜」の「歡喜」というのは、18願の成就文（じょうじゅもん）に「信心歡喜」という言葉が出てきます。すなわち、私に真実が届き、我が身の真実に目が覚め、自分は自分でよかったのだと、自我の迷妄から解き放されたとき、喜びと感動にあふれるということですね。また、「いそぎ浄土へ参りたき心」というのは、第4条の「浄土の慈悲」のところに「いそぎ仏になりて」とあります。また、第5条には、

「いそぎ浄土のさとりをひらきなば」とあります。すなわち、たすけたい人がいる時に、私たちの力ではどうしようもないので、「いそぎ浄土に参りたき心」が起きるということです。しかし、自分には、そんな心は一向に起きないというのが唯円の疑問だと思えます。それに対して、親鸞は、それは、「煩惱の所為（なすところ）」だと言っています。すなわち、私たちは、生きていく限り、煩惱からは逃れられないということです。

私は、この第9条は、念仏によるすくいはどういうものかを示しているように思うのです。第7条には、「念仏者は無碍の一道なり」とありますから、信心を得たならば、浄土に向かってまっしぐらに歩めるものだと思うわけです。しかし現実にはそうはならないというのが、この第9条だと思えます。要するに、信心歡喜は一時の話で、喜びは続かないということです。

第7条の解説にも述べたように、白道は、常に火の河と水の河に覆われるわけですから、見えたり、見えなかつたりするのです。ですから、生きていく限り、人を消し去っていく生き方は変わりません。しかし、念仏を申し、念仏の声によって目を覚ます時だけ、消し去った人がまた見えるようになるのです。そこに一時の人間関係の回復が起きます。人を裁く心から解放されるのです。平野先生の言葉で言えば、「やさしくなる」です。そしてそれは、自分自身を裁くことからの解放でもあります。こうでなければならない（must）、こうすべきだ（should）という心からも解放されます。そういう解放感の喜びは味わえますが、それは長くは続きません。またすぐに煩惱に覆われて見えなくなります。そういうことを繰り返すのが念仏者の道だということです。

ですから、信心を得たからといって、苦悩が無くなるわけではありません。生きていく限り、次から次に問題が起こってきます。不安と不満と後悔からは逃れられないのです。しかし、その中で、それが「煩惱の所為なり」と目覚めることが信心なのです。

ですから、夫婦喧嘩が無くなることはありません。一生それは続くと思えます。互いに相手を消し去り、念仏によって再生し、また消し去るの

です。しかし、そういう苦悩の人生の中で、確かな道を与えられるのです。それが白道ですね。その白道は必ず浄土に至る道です。

すなわち、念仏のすくい、すなわち、「正定聚不退」です。必ず浄土に至る道に定まったということです。もう後戻り（退転）することはないということです。これは、48の本願の内の11番目の願に表されています。

**たとひ我、仏を得んに、国の中の人天、定聚(じょうじゅ)に住し必ず滅度に
至らずんば正覚を取らじ。**

(真宗聖典 P.17)

親鸞は、これを「必至滅度の願」と呼んでいます。必ず滅度に至らせるという願いです。ここで、「滅度」というのは、仏の覚りの世界です。もう迷わないということです。第1条の解説のプラトンの言葉で言えば、アイデアの見える世界に生まれるということです。現代の科学で言えば、生命の根源に立ち返ることだと思えます。生命のもとをたずねれば、それは地球の生命、果ては宇宙の生命まで行き着くように思えます。人間の細胞が生滅を繰り返すように、地球上の生物も生滅を繰り返します。また、広い宇宙の星々も生滅を繰り返しているのです。私たちのいのちは、そういう生命の根源につながっているように思えます。

そういう色もない形もない仏陀の覚りの世界（滅度）を、私たちの見える形にして表したものが浄土です。私たちは、命終えて、この身から自由になれば、そういう浄土に生まれるということです。そこは、苦のない世界ですから極楽です。そういう極楽浄土に生まれることが決まったというのが正定聚です。すなわち、11願の成就文は、「それ衆生あり

てかの国に生ずれば、みなことごとく正定の聚に住す。(真宗聖典 P.44)」となっています。

ですから、私たちは、命を終えた時に浄土に生まれるのであって、この世で浄土に生まれるわけではありません。ただし、浄土に触れることはあるのです。すなわち、念仏によって、真実が届けられ、「私」が幻想だと目が覚め、そこにありのままの自分が立っておれる場を発見するのです。それが浄土です。浄土に生まれなくても、これが浄土だとわかるのです。煩惱からは逃れられませんが、煩惱から自由になった世界を感じることができるのです。すなわち、私たちが、命終わって煩惱から自由になった世界が見えたということです。しかし、そこで見えた浄土は、すぐに煩惱に覆われて見えなくなります。それでも一度目が覚めれば、それを見失うことはないということです。

ですから「踊躍歡喜」の心が起きないというのは、煩惱を抱えて生きている身であれば当然のことなのです。念仏の教えは、煩惱具足の凡夫としてこの娑婆を生き抜く道なのです。世間から隔離されたところで、念仏を喜ぶ道ではないのです。

私たちは、「すくい」というと苦が無くなることだと思えます。あるいは煩惱が無くなることだと考えます。しかし、苦しみがあるから喜びもあるのです。例えば、嫁さんの代わりに、何でも自分の言うことをきくロボットと暮らしたとして、それで満足できるでしょうか？ すぐに飽きると思います。ですから、私たちの「思い」の方向ですぐいを求めても、そこには本当のすくいはないのです。真のすくいは、自分が自分であることを喜べるということです。天上天下唯我独尊の自分として生き

ることができるということなのです。どんな境涯であろうと、生まれてきてよかったと言えることが本当のすくいなのです。

9.2 死の問題

ユヴァル・ノア・ハラリの『ホモ・デウス』に、人間の最も強い欲求（煩惱）は生存と生殖だと書かれています。ただ、生殖の欲求に関しては、先進国では衰えてきているように思います。これは、人類の爆発的な人口増加によって、生命体の本能が抑制作用を働かせているのではないかと想像しています。ですから、少子化は悪のように言いますが、それは癌細胞である人間が正常細胞に戻ろうとしている現象だと思います。しかし、生存の欲求は、衰えることを知らず、日本も超高齢化社会に突入しつつあります。そして、『ホモ・デウス』によれば、その内、不死の人間が登場すると言うのです。

不死の問題については、すでに手塚治虫が『火の鳥』で取り上げています。人間が不死を手に入れようと、「火の鳥」を追いかける物語です。そして、その中で不死を手に入れた人間が描かれるのですが、それは永遠に苦しみから逃れられない悲惨な人間の姿です。

また、朱戸アオの漫画を原作とする『インハンド』というテレビドラマでも、生物は、子孫に生命を受け継ぐことで、環境の変化に適応してきたのであって、不死になれば、その種は環境の変化に適応できず絶滅すると言っています。したがって、生命にとって死はすくいなのです。

実際に、私たちの身体の細胞も生まれ変わりながらその機能を保っているものであって、細胞の死がなかったら私たちがこんなに長生きすること

はないのです。ですから本当の不死を手に入れるには、無機物になっていくしかありません。すなわちロボットです。しかし、それで人間は幸せなのでしょうか？

ですから、人間にとって死というのは非常に大きな問題です。しかし、前著でも述べたように、人間は死が恐ろしいのではなく、「私」という自我の崩壊を恐れているのです。ですから、「私」という自我の崩壊に耐えられず自殺する人はたくさんいます。『ホモ・デウス』でも、現代は、戦争や飢えで死ぬ人より自殺者の方が多いと言っています。ですから、人間にとってのすくいは、不死ではなく、「私」という自我からの解放です。「私」が崩れ去っても立っておれる大地が必要なのです。それが浄土です。

ですから、浄土があるということは、いつでも死ねるということです。ただし、「私」の要求によって死を選ぶことはありません。「私」が崩れ去っても立っておれる大地があるからです。しかし、娑婆の縁が尽きて、死がやってくれば、それを受け入れる覚悟はできているということです。ただし、堂々と死ねるかどうかはわかりません。人間は、死ぬまで煩惱を抱えていますから、「死ぬのは恐ろしい」「死にたくない」と言って、最後までがくかも知れません。それは煩惱ですから仕方がないのです。それこそ、「苦悩の旧里は捨てがたい」のだと思います。しかし、浄土は見えていますから、死後の迷いはないのです。ですから、死を前にしても、煩惱の意のままにということだと思えます。要するに、お任せということですね。

私も、二度の癌を乗り越えてここまで生きてきたのですが、学生時代の癌では放射線で唾液腺がつぶれ、水分の少ない食べ物を飲み込むのが難しくなりました。また、48歳の時の癌では、上あごの半分が無くなったため、入れ歯をしないと会話が難しくなりました。さらに、最近では、嚥下が悪くなり、特に緊張すると、食べ物が喉を通らなくなることがよくあります。結婚するときに、父が亡くなった57歳までは生きて、がんばってきましたが、今はそれを越えて還暦を迎えようとしています。その間、細川巖先生も、平野修先生も、さらには児玉暁洋先生も亡くなりました。ですから、時々、私としてはもう十分生きた、もうそろそろ浄土に行ってもよい頃ではないかと思うことがあります。しかし、この9条を読むと、「踊躍歡喜のこころもあり、いそぎ浄土へもまいりたくさふらはんには、煩惱のなきやらんと、あやしきさふらひなまし」ですね。親鸞聖人に、まだ早いと叱られているような気がします。

ただ、少なくとも、21歳で癌になった時の心境と、今の心境は違います。人間も、歳を取るにしたがって、身体が死を受け入れるようになっていのだと思います。ですから、生存の欲求も、歳とともに衰えていくように思います。要するに、身体は死期を知っているのだと思うのです。それが「ちからなくしてをはるとき」のように思います。煩惱もやがて燃え尽きるということです。

ただ、親鸞は、あの時代に89歳まで生き延びて、75歳頃まで『教行信証』の補足・改訂を続け、75歳で『浄土和讃』『高僧和讃』を作り、79歳で『浄土文類聚抄』、83歳で善鸞義絶、その後も85歳まで和讃の編纂等を続けるわけです。そのエネルギーはすごいですね。

考えてみれば、細川巖先生も、死の直前まで仏教の講義を続けられましたし、平野修先生も、死の直前までベッドの上で著書の校正をされていたと聞いています。そういう意味では、念仏というのは、与えられた人生を最後まで生き抜くエネルギーを与えるものかも知れません。すなわち、煩惱を減するのではなく、煩惱を生きるエネルギーにして、自分に与えられた使命を果たし切るわけです。

9.3 還相回向

念仏者は、この世で煩惱を燃やし尽くして生きるのですが、それは、死ねば滅度に至るということがわかっているからできるのです。いつでも浄土に行けるなら、もう少し頑張ってみようかと、生きる意欲を与えられます。煩惱に縛られていれば、「私」が傷つけられるくらいなら死んだ方がましと思うでしょう。それが、「私」を生きることから、「生命」そのものを生きることになれば、折角、いのちが与えられているのだから、次にどんな自分が出てくるのか、もう少し生きてみようとなります。どんな恐ろしい未来でも、折角だから見てみようとなるのです。

そして、この浄土の世界を有縁の人に知ってもらいたいという意欲も起きます。「念仏でたすかるといのは本当だ」と言いたくなります。「親鸞の言っていることは、私にも確かに起きた」と言いたくなるのです。それが念仏の働きです。

そして、念仏者が死んで浄土に生まれれば、それで終わりかと言えば、この『歎異抄』を読むと、それで終わらないのですね。いそぎ浄土に参って、そこからまた仕事があるのです。すなわち、浄土に生まれたら、

すぐに「南無阿弥陀仏」になって有縁をたすけに行くのです。それが願われているのが、48の願の中の22番目の願です。

たとひ我、仏を得んに、他方の仏土のもろもろの菩薩衆、我が国に來生して、究竟して必ず一生補処に至らん。その本願の自在の所化、衆生のためのゆえに、弘誓の鎧を被て、徳本を積壘し、一切を度脱し、諸仏の国に遊んで、菩薩の行を修し、十方の諸仏如来を供養し、恒沙無量の衆生を開化して、無上正眞の道を立てしめんをば除かん。常倫に超出し、諸地の行現前し、普賢の徳を修習せん。もし爾(しか)らずんば、正覚を取らじ。

(真宗聖典 P.19)

親鸞は、これを「還相回向の願」と呼んでいます。この成就文は、「かの国の菩薩は、みな当に一生補処を究竟すべし。その本願、衆生のためのゆえに、弘誓の功德をもって自ら莊嚴し、普く一切衆生を度脱せんと欲わんをば除く。(真宗聖典 P.51)」です。要するに、還相の菩薩は、仏にならずに、またこの世に還ってくるのです。「一生補処」というのはいつでも仏になれる位です。滅度に至って仏になれるのに、そこに留まらずに、また娑婆の世界に戻るといことです。

映画『マトリクス』で言えば、ネオは、コンピュータの支配から抜け出したのですが、再び仮想現実の中に帰って、仮想現実には生きている人をコンピュータの支配からすくおうと戦いますね。あれが還相の菩薩です。ただし、念仏者の場合は、命終わった後の話ですから、この世では阿弥陀仏になって、「南無阿弥陀仏」と有縁の人に呼び掛けるのです。すなわち、17願の「諸仏称名」です。念仏者は、死んでも、その人生が「諸仏称名」の働きを持つということです。

すなわち、22願が17願（「諸仏称名の願」）につながり、17願が18願の「眞実信心」を与え、そして11願の「正定聚不退」の道を歩む念仏者が生まれ、それがまた22願の還相の菩薩「南無阿弥陀仏」となつて有縁の人に働きかけるといことです。

私の場合も、細川先生、平野先生、児玉先生、父の念仏が、私の目を覚まし、正定聚不退の人生を与えてくれました。そして、私が死ねば、私の有縁の人たちが、また念仏の声を聞くことになるといことです。そして、それらは、皆、弥陀の本願の働きであり、念仏の働きだといことです。ですから、親鸞の教えは、他力で貫かれているのです。

9.4 まとめ

私は、21歳で癌になった時、細川巖先生から、この第9条の「死ななざるやらんと、こころぼそくおぼゆることも、煩惱の所為なり」という言葉を聞いて目が覚めました。そして、そこから、平野修先生の教えによって、それが弥陀の本願の働きであり、念仏の働きであったことを知りました。そして、今は、日々の生活の中で、念仏の声を聞いて、時々目を覚ましながら生きています。大半は、煩惱に覆われて、人を消しながらの生活ですが、時々念仏が目を覚ましてくれます。この歳になると、それが本当にありがたく感じます。

第10条

一、

「念仏には無義をもて義とす。不可稱・不可説・不可思議のゆへに」とおほせさふらひき。

(出典：<http://web.otani.ac.jp/tannisyo/>)

【私なりの現代語訳】

「念仏(南無阿弥陀仏)は、人間には計れないものを意味としています。それは、人間の思いで称(たた)えることも、説くことも、考えることもできないものだからです。」と仰せられた。

10.1 念仏は人間には計れない

これまで述べたように、念仏は、人間の「思い」を破ってくるものです。例えば、鬱病というのは、自分はこうあるべきだ、社会はこうあるべきだ、自分はこうすべきだ、他人もこうすべきだ、という理想が強い人がなりやすいと言われています。すなわち、自分も周りの環境も、受け取れないわけです。

そして、そういう理想は、親の期待である場合が多いように思います。特に、現代のような少子化の時代になると、親の期待が子供に非常に重くのしかかるように思います。それで、周囲の環境に適応できず引きこもりになったり、重責から逃げ出すためにフリーターになったりするようなケースが増えているように感じます。要するに、人間の「思い」は、往々にして生きる意欲を削いでしまうのです。

そういう人間の「思い」を破ってくるものとして念仏があるのです。ですから、「ただ念仏によって弥陀にたすけられまひらすべし」というような言葉を聞くと、私たちは、そんなはずがあるものかと思います。もし、そのとおりにだと思われる教えなら、人間の「思い」を破れるはずがありません。

ですから、念仏は「問い」を生み出すものなのです。なぜ親鸞は、こんな言葉で目が覚めたのだろうか？ 念仏とは何か？ 弥陀とは何か？ そしてたすかるというのはどういうことなのか？ そういう「問い」が、人間の「思い」を破ってくるということです。

人間の「思い」の方向にある教えが、義の有る教えです。要するに自力の行を説く教えです。ですから、病気になれば、お酒を止めなさい、甘いものは控えなさい、たばこを止めなさい、そして、運動をしなさい、規則正しい生活をしなさいなどと教えられます。これは、戒を保ちなさいという仏教の教えと同じです。そして、生きる意欲がわかないとなれば、読書をしなさい、スポーツをしなさい、ボランティアをしなさいと、様々な行を教えられます。そういう自力の行であれば、なるほどと思うのです。それならやってみようかと。

ですから、私も幼い頃から仏教を聞かせられて育ちましたが、それは、将来尊い人間になるためだと思っていました。ですから、その頃は、念仏などは余計だと思っていました。必要なのは、仏教の教えを聞いて、勉強することだと思っていたのです。そうすれば将来に役立つと。

しかし、念仏の教えは、そういうものとは全く違うのです。そういう人間の「思い」の方向には、真のすくいはいないと言うのです。そこにある

のは「疑城胎宮」という気持ちの良い世界だが、それは真の浄土ではないと。要するに、釈迦（仏陀）の教えの真意は別にあって、釈迦は、自力の教えを説いているが、それは、仏教に興味を持ってもらうための方便であって、人間を真のすくいに導くのはただ念仏だけだと。

ですから、念仏は、人間の「思い」で計れるものであってはならないのです。人間の「思い」で計れるものは、すべて人間の「思い」の中に取り込まれます。ですから、念仏は、人間の計れないものだというので、「無義」と言っているのです。たたえることも、説くことも、考えることもできないもの、それが念仏だということです。ですから、目が覚めていない人が、念仏をたたえたり、説いたり、解釈したりしても、それは、念仏の本当の意味ではないということです。

10.2 まとめ

本書を書いてきて、最後が「念仏には無義をもて義とす」ですから、私ごとが解釈できるものではないと叱られているような気がします。

しかし、現在までに『歎異抄』の様々な解説書が出ていますが、その多くは、念仏に「義」を与えるようなものになっているように思うのです。あるいは、それを避けるために、念仏よりも信心が大事なのだというような解説書もあるように思います。要するに、念仏を申さなくても、信心は得られるというものです。ですから、『歎異抄』はすばらしい著書だが、自分は、念仏は称えない、あるいは念仏は必要としないと言われる方もあります。

私も同様に、念仏には反発してきました。特に、父の生きている間は、念仏は嫌いでした。私の実家は、正月に親戚が集まると、すぐに念仏の話が始まるのです。それが嫌でたまりませんでした。子供にとっては意味のない話だからです。酒に酔っては、「念仏ひとつ」と言い出す父が、本当に教養がなく嫌な父だと思っていました。

しかし、目が覚めてみれば、その意味のない念仏が意味を持ってくるのです。父の57年の人生が、ただこのことを伝えようとしていたのだと思えるのです。すなわち、念仏には、どんなつまらないと思われる人生も、そこに素晴らしい意味を与える力があるように思います。たった6字の名号が、つまらない、空しいと思われる人生に輝きを与えるのです。

たぶん念仏が必要ないという人は、念仏がなくても立っておれる大地があるのです。しかし、『歎異抄』は、自分の人生に意味が見いだせず、もがき苦しんでいる悪人のために説かれたものです。そういう悪人に生きる意味を与えるもの、それが念仏だと思います。義なきがゆえに、義を与えるもの、私たちの「思い」を常に破ってくるもの、「南無阿弥陀仏」とは、そういう言葉なのだと思います。

『歎異抄』、こんなすばらしい書物にであえて、ここまで生きてきた意味があったのかなと思います。

参考文献

- [1] 真宗聖典編纂委員会：『真宗聖典』，東本願寺出版部
- [2] 浄土真宗本願寺派総合研究所：『浄土真宗辞典』，本願寺出版社
- [3] 木田元編：『哲学キーワード事典』，新書館，2004
- [4] ユヴァル・ノア・ハラリ著：『サピエンス全史（上）（下）』，河出書房新社，2016
- [5] ユヴァル・ノア・ハラリ著：『ホモ・デウス（上）（下）』，河出書房新社，2018

著者略歴

藤井大地（ふじい・だいじ）

1984 年，広島大学工学部第四類建築学課程卒業，同大博士前期課程修了・後期課程単位取得退学。同大助手，ミシガン大学研究員，東京大学工学系研究科助手（環境海洋工学専攻），近畿大学工学部建築学科准教授を経て，2008 年より同大教授。博士（工学）。著書として『はじめて学ぶ建築構造力学』（共著），『建築構造設計・解析入門』（共著），『Excel で解く構造力学』，『Excel で解く 3 次元建築構造解析』，『建築デザインと最適構造』などがある。

学生のための歎異抄入門

2020 年 4 月 1 日 第一版第一刷発行

著作者

藤井大地

© Daiji Fujii, 2020

藤井大地 dfujii@hiro.kindai.ac.jp

印刷・製本 三原プリント株式会社
